
オレンジと坂道

小丹小菜栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレンジと坂道

【Nコード】

N2343H

【作者名】

小丹小菜栖

【あらすじ】

坂道の途中で恭子が転がってしまったオレンジ。男は体を張って止めた。恭子は、オレンジをみかんと呼ぶ売れない小説家に恋をした。

(1) オレンジとみかん

「暑っいなあ〜もお…」

8月のお盆を過ぎた頃、恭子はスーパーで買った食材と果物屋で買ったオレンジ10個をぶら下げて自宅マンションに続く坂道を登っていた。

「あ〜、もうダメだ。暑い」

「うわっ、やだあ」

恭子の手からオレンジの入った袋がツルツと外れ、オレンジ10個は、袋からこぼれ登ってきた坂道を転がり落ちていった。

さ、最悪…どうしょー。

恭子が慌てていると5mほど恭子の後ろを歩いていた大柄な男が、急に手足を伸ばし地面に寝そべった。

「……………」

恭子の目が点になる。

コロコロと転がるオレンジは、その男の体に当たると順番に止まっていき、男は体を張って

オレンジの転がりを阻止した。

「……………」

恭子が、おずおずと男の所に近づくと、「早く拾え…」男は寝そべったまま、恭子に言った。

ポーゼンと立ちすくむ恭子は、口を開いたまま男を見ていた。

「…なにやってんだよ、早く拾え」

男の声に我に返った恭子は、「は、はい！」と、男の体のところでストップされている

オレンジを急いで拾いあげた。

「す、すみません。ありがとうございます」

恭子が礼を言うと、ヨレヨレの白いTシャツにヨレヨレの紐パンにサンダル姿の男は、

「それ一個でいいよ」と、オレンジを指差した。

「…へっ?」

恭子は意味がわからず首をかしげる。

「お礼、そのみかんくれ」

男は手を出した。

「え?あっ、は、はい」

恭子が男の手の上にオレンジを一つ乗せると男はポケットにオレンジを突っ込み歩きだした。

ドサツと、音がし、男が振り返ると今度は恭子が地面に寝そべっている。

暑さのあまり貧血で倒れたのだ。

この日の気温は36度まで上がっていた。

ん、なんか冷やりとして気持ちいい…

恭子は頬にぶつかる風と頭の下に感じる冷たさで目を開けた。

「おっ。気がついたか?」

へっ?ええー!」

恭子は驚き、起き上がろうとしたがまだ体に力が入らない。

頭の下には保冷剤があり、目の前にはオレンジを拾ってくれた男がウチワを持って恭子を扇いでいた。

「おまえの荷物とおまえで俺の方が倒れそうになったよ。ったく！」
「でも、おまえ、そんな色白でヒヨロヒヨロでちゃんと飯くってんのか？だからぶっ倒れんだぜ」

男は貧血で倒れた恭子と荷物を担いで、木造アパートの二階、六畳の自分の家に運んでいた。

「あ、あのう…私…」

「みかん一つじゃ、足んねーよなあ、お礼。二個…三個くれ、みかん！」

男はウチワを扇ぎ続けながら言った。

少し楽になった恭子は起き上がり、男と向い合うように座った。

男は何も言わず、恭子の顔の前でウチワを扇ぎ続けている。

恭子が少し体を右に傾けるとウチワも右に付いて来て、左に傾けるとウチワも左に付いてきた。

一生懸命扇いでいるウチワの風が恭子の顔にバンバン当たっている。

「も、もお…大丈夫ですので…ウチワ…いいですので」

「え？あ、そう？」

恭子が軽く頭を下げ、そう言うと、男は自分を扇ぎだした。

この部屋にはクーラーはおろか扇風機もない。

風鈴の音がチリンチリンと、きれいな音を鳴らし、恭子が音の方を見ると窓の外はすでに夕焼け空になっていた。

「やっと、少し風が出てきたな。今日はすんげー暑かったもんな」

男は真向いに座っている恭子に言った。

恭子がやつと自分を取り戻した。

「キヤ、キヤア！」

「な、なんだよ！急に！」

男は体を後ろにのけぞり驚いた。

「ご、ごめんなさい！私ったら助けただいたたにお礼も言わず、ポーっとしちゃって！」

「なんだ、そんなことか。別にいいよ。びっくりした…」

「本当にすみません！ありがとうございます！」

恭子は深々と頭を下げた。

「あつ、水飲むか？」

男は立ち上がり、蛇口から直接コップに水を入れ、恭子に渡した。

「ミ、ミネラルウォーターじゃないのね…」

恭子は、いつも決まったミネラルウォーターを飲んでいたが、喉が渴いていたので仕方なくコップを受け取り水を飲み干した。

ふと、ちゃぶ台の上を見ると、ガスか水道の領収書が置かれてあり、住人の名前がカタカナで書かれていた。

（スガノマサル）

「スガノマ…サル？」

恭子は呟いた。

男は恭子を見た。

「スガノマ…サルさん？」

恭子がもう一度、男の名前を読んだ。

「あのさ、なんでそこで切るんだよ！」

男はムツとして言った。

「え？す、すみません……」

「スガノ マサル だよ……、サルじゃねーよ」

マサルはブツブツ言った。

「ごめんなさい！スガノさん……」

「体も楽になったので、そろそろ帰ります。本当にありがとうございました」

そう言うと、恭子はオレンジの袋を持って立ち上がった。

「おい、みかん三個置いてけよ」

みかんにこだわるマサルである。

「あつ、ご、ごめんなさい」

なんか、あやまってばっかじゃない、私……。

それにみかんじゃなくてオレンジだし……。

恭子はそう思いながらも、言われた通りオレンジを三個ちゃぶ台に乗せた。

「あつ！そうだ！」

えっ、まだ何かあるんですかあ……

マサルの声に恭子は不安になった。

「スーパーの袋、なにが入ってるかわからなかったから冷蔵庫にぶつこんどいた」

マサルはそう言い、冷蔵庫を指さした。

自分で勝手に出して持って帰れということだ。

「…はあ、すみません」

恭子はまた謝り、冷蔵庫を開けた。

食材の入った袋は、そのまま小さめの冷蔵庫に押し込められている。恭子がそれを取り出すと、冷蔵庫の中にはキャベツが四分の一とポ
ン酢とビールだけがポツンと残った。

へっ？この冷蔵庫なんにも入っていない…

恭子が冷蔵庫の中をポケットと見てみると、「涼んでんじゃねーよ、
電気代もつたいねーだろ」マサルに言われ、恭子はすぐさま閉め、
謝った。

「う、ごめんなさい」

グウ~~~~~キュルキュルウウウウ。

マサルの腹から鳴ったその音は狭い部屋に響き、「……………」
二人は顔を見合わせた。

「あつ…も、もう夕食の時間ですよ。私！お礼に何か作ります。
食材もあるし」

恭子は自分のスーパーの袋を持ち上げて見せた。

「マ、マジイイ？！」

マサルの目が輝きはじめる。

「俺さ、ここ一週間キャベツと賄い食だけだったんだよなあ、助か
りい。じゃ、早く作れ」

な、なんでこんなに上から目線なの！この人。

恭子は怪訝な顔をしながらも、小さい流し台に立った。

が、包丁とまな板、鍋と茶碗が二つとフライパンしかない。

「あのお、お皿は？」

「ない！」

「調味料、えーっと、塩とか砂糖は…」

「ない！」

「ええー?!」

これで何を作れと…どうしよう…

「あつ！冷蔵庫のキャベツは使うなよ、明日俺が食うんだから」

「は、はい…」

とりあえず、恭子はステーキ用に買った霜降り肉をあまり切れない包丁でスライスし、野菜を適当に切った。

30分ほどして、ちゃぶ台に鍋だけが置かれた。

出汁も何も無いので鍋に水を張り肉と野菜をぶち込んだ、ただの水鍋だ。

「うおおおお、すげー、肉じゃん！何ヶ月ぶりだ！」

マサルは嬉しそうにハシヤイでいる。

「ポ、ポン酢は使ってもいいですか？」

恭子は恐る恐る聞くと「ああ？ああ、いいよ」マサルはご機嫌に言った。

二人は、8月のただいま夏真っ盛りの中、クーラーも扇風機もない畳の部屋で鍋を囲った。

具材は、鍋に合わない野菜も入っていたが、マサルは汗を掻きながら久しぶりの肉をうれしそうに食べた。

一膳しかない箸はマサルが使い、恭子はフォークを手にしている。

「うんめえ！肉！暑い時に鍋っていうのもいいよな！おまえも早く

食べよ。俺みんな食っちまうぞ」

っていうか、もうお肉ないし。

恭子はおいしそうに食べるマサルを見て、可笑しいのか楽しいのかわからない気持ちになっていた。

「おまえさあ」

「あつ、坂井です。坂井恭子といます」

まだ名前を言っていなかった恭子が名乗った。

「恭子さあ」

い、いきなり呼び捨てー?!

マサルはサラリと恭子の名を呼んだ。

「は、はい。なんですか?」

「恭子さあ、何やってる人?何歳?どこに住んでんの?」

「え?」

「だってさあ、若そうなのに、いい食材買いこんでんじゃん。肉だって霜降りだしさあ」

マサルが鍋を見ながら恭子に言った。

「ふ、普通のOLです。24歳で、住まいは4丁目」

「ふくん、OLって結構いい生活してんだあ。いいなあ、俺もOLになろうかな」

いやいや、なれないから…

「スガノさんは?」

「ん?あつ、マサルでいいよ。サルとか呼ぶなよ」

呼ばないって…

「俺は29歳、住まいはこー!」

住まいは、わかつてますって…

恭子は一人突っ込みを入れながら聞いた。

「マサルさんの仕事は…？」

「俺？俺は居酒屋でバイトしながら、物書きしてる」

「物書き？」

「小説家！一応、出版もされてんだけど、あんま売れてねーな。な
んでみんな俺の才能がわかんねーのか、わかんねー」

マサルは、大学生のころから小説を書いていて4冊ほど出版して
いるがどれもあまりパツとしていない。

一応今は月刊誌に連載を二本書かせてもらっているだけで、週5回
の居酒屋でのアルバイトが主な収入源だ。

「へえ、小説家なんだあ！すごい！」

「す、すごくはないよ…売れてねーし」

マサルは恭子の素直な驚きに照れながら言った。

「小説家の人って、本とか…他の小説家の本とか読むんじゃないん
ですか？というか、テレビも…？マサルさんのとこ…」

この六畳の部屋を見渡す限り、テレビもコンポも本棚もなく、ある
のはちゃぶ台と恭子が寝かされていた万年寝床のような布団だけだ。

「何にもないよ、俺んとこ。テレビ見ないし、人の小説なんて読ま
ないし、他のヤツが書いた小説なんて読んだら、余計なもの頭に入
っちゃうからな」

マサルは、そう答えながら、普通は鍋に入っているわけがないズツ
キーニを食べた。

鍋にキユウリってーのも合うんだ。

食事を終え、恭子が後片付けをし終わる頃には9時を回っていた。

「もうこんな時間…遅くまでお邪魔しちゃってごめんなさい」

恭子がオレンジの入ったエコバックを持った。

「ん？もう帰る？こっちこそ、ありがとな！久しぶりに美味しいもん食わせてもらって元気が出た」

「いえ、私こそ助けてもらって、ありがとうございました。あつ、残りのお野菜置いていきますので食べてください」

恭子は鍋に使わなかった野菜を冷蔵庫に入れておいた。

「うお、いいの？助かるぜ！」 マサルはガッツポーズをした。

「…じゃ、私はこれで…」

「あつ、俺も風呂に行くから下まで一緒に降りようぜ」

マサルはタオルと石鹸が入った洗面器を冷蔵庫の上から取ると、玄関で靴を履いている恭子の所に来た。

「この辺りに銭湯つてあるんですか？」

ここは住宅地なので一番近くの銭湯は、歩いて行っても30分はかかる。

「銭湯なんてないよ。このアパートの敷地内奥に水道があるんだ。

ホースもついているし便利だぜ！ちゃんと大家のバアちゃんにも許可もらってるし」

「…ホ、ホース…？」

マサルの住むアパートは部屋数が6戸あるが、マサル以外に学生が二人住んでいるだけで残り3部屋は空室だ。

地主の大家が好意で貸してくれているため、アパートはボロボロだ

が家賃は2万円と、この辺りの地価を考えると格安というよりありえない家賃だった。

階段を下り、

「俺んちの風呂こつちだから。じゃー！」

「あつ、今日はありがとうございました」

マサルはアパートの奥へ、恭子は自宅に向かい歩き始めた。

二人は連絡先の交換もしないまま別れた。

(2) また会えた

暑かった夏は少し和らぎ、朝夕は涼しくなっていた9月後半。

マサルはバイト先の居酒屋「ピヨピヨ」のスタッフルームで休憩に入っていた。

同じバイト仲間ですぐに通っている富美恵と専門学生の美和と三人で賄いを食べながら話していた。

「ねえねえ！ぶっちゃけ聞いちゃうけどさあ！マサルと店長って、出来てたり

しちゃうわけ?！」

富美恵はなぜか興奮状態で目を輝かせてマサルに聞いた。

「…あ”あ”?!なんだよ、それ」

まったく意味の分からないマサルである。

店長は、体の線が細く年齢33歳にしては若く見え、顔もかわいらしい感じで、

少し弱弱しく見えるが心が強く、見かけによらずリーダータイプなのでスタッフを

引っ張っていき頼りがいがある。

が、店長は男だ。

富美恵がニタニタしながら言った。

「ぐふふふ…マサルと店長お似合いなんだもんなあ、きよほほほ」

「…?」 マサルは言葉を失った。

「富美ちゃんさあ、想像力抜群で、腐女子なのよね」 美和が言うと

「はあ?ぶじよして何?」 マサルが聞いた。

「腐った女子って書くのよ、腐女子。いわゆる…」
美和がマサルに説明を始めた。

「へー、そうなんだ。富美ちゃん、醜酔体なんだ…」

「・・・いや、私醜酔じゃなくて」

「あゝ、ごめんごめん、腐ってんだっけ…おまえ」

「・・・うっ…もう、いいですよ…」

富美恵は意味を理解しないマサルにガツクリ肩を落した。

でも、この先も店長とマサルの二人の行動を監視するぞ！
と！

富美恵は腐女子であるがゆえ、いい男二人のツーショットにはいつもアンテナを

はっているが、店長にはちゃんと女の恋人がいる。マサルも女が好きだ。

残念ながら富美恵の期待には応えられない。

「あつ、年末に関谷純の映画公開されんだよねえ」 美和が富美恵に言った。

「そうそう、相手役・坂井恭香でしょ？あの人かわいいよね〜」

坂井恭香？どっかで聞いたことあんなあ。

マサルが考えていると、

「マサル、坂井恭香ってタイプ？」 美和に聞かれた。

「…んー、誰、それ」

「・・・」 美和と富美恵は

「でさあ、富美ちゃん〜」 二人で別の話を始めた。

テレビも何も見ないマサルには、芸能人の名前など分かるはずがなかった。

坂井恭香…んーやっぱどっかで聞いたような名前だ。どこでだっけなあ？

居酒屋「ピョンピョン」は、地元の駅にあるのでマサルは歩いて通っている。

深夜1時に仕事上がり、帰宅途中にコンビニ入り、雑誌コーナーで立ち読みをしていた。

「坪井さん、ごめん、コンビニ寄ってもらっていい？」

車の中で坂井恭香がマネージャーの坪井に言い、車がコンビニの前で止まった。

「じゃ、ちよつと待っててね」

恭香は車を降りコンビニに入ってしまった。

あつ、あつたあつた。

ジャンボプリンを二つ両手に持ち、雑誌コーナーの前に来た。

……あれ？

雑誌をジューーーーーっつと食い入るように見ている背の高い男が視野に入った。

この人…スガノマサル！スガノマサルさん？！

恭香こと、恭子は少しだけ近づいて、チラッとマサルの横顔を見た。そしてマサルと確認して更に近づいた。

「マサル…さん？」 声をかけるとマサルは

「ん？なに？」 雑誌に目を落したまま返事をした。

ええ？誰が呼んだか確認なしで返事してる…

「えつと…えつと…」

恭子は、困ってしまいマサルと雑誌の間に顔を突っ込んでマサルの顔を見た。

「う、うわっ、なにすんだよ、いきなり…」 マサルは驚いて一歩後ろに下がった。

「マ、マサルさん？」

「誰だよ、おまえ…」 マサルは怪訝な顔で恭子を見た。

恭子は口ケ帰りだったので、化粧をしていて髪型も違っているため、マサルは誰だかわからなかった。

「…えつ、恭子です…先月、助けてもらって…」

「ああ？ああ、あん時のみかんか！なんだ今日は雰囲気が違うからわかんなかった」

「その節はありがとうございました」 恭子は丁寧にお礼を言った。

「いって、別に。こっちも肉食わせてもらったしな、チャラにしよーぜ」

二人は笑顔で会話していたが、恭子の顔がマサルの持っていた雑誌を見て赤くなった。

「…」

「あつ、これエロ本！買う金ないから立ち読みしてんだあ。スツゲーぜ。」

「このねーちゃんの胸！」

そう言つとマサルは、そのおねーちゃんの胸を見てから恭子の胸に視線を落した。

「え”え”？」

恭子は思わず胸を押さえたが、両手にジャンボリンを持っていた

ため丁度胸にプリンが
二つ並んだ。

「恭子の胸よりプリンの方がデカインじゃん。あははは〜」

ほ、本物みたことないくせに…うっ…

マサルに笑われ恭子は落ち込んだ。

「おまえも見る？ほら！」 マサルは恭子に雑誌を見せた。

「け、け、結構です…」

恭子は真っ赤になった。

「あははっ、おまえ色白いから赤くなるとおもしれ〜な」

「……」

コンビニの自動ドアが開いた。

「恭ちゃん？どうした？その人…」

恭子と男が話している様子を車の中で見ていて心配になった坪井が
恭子呼びに来た。

「あっ、いえ何でもないです」

恭子が坪井に言うと 「明日も朝早いんだから、早く買って帰ろう」
坪井が恭子を促しレジに向った。

「じゃ、また…」 店を出るとき恭子はマサルに声をかけ会釈をし
て出て行った。

マサルも軽く首を動かし会釈をした。

ふうん、男とこんな時間までデートか…っつーか、オヤジ好
き？

まつ、かわいい顔してっから男なんて選び放題か？

マサルは恭子の乗った車をガラス越しに見送り、またエロ本に目を
落した。

うおー、このねーちゃんは、いいケツしてんなあ〜。

恭子は坪井に言われた。

「恭ちゃん、さっきの人ファンかなにかだった？危ないから話しかけられても」

あんまりやさしくしちゃダメだよ。恭ちゃん親切だから」

「いえ、あの人は……」

「ん？」

「いえ、気をつけます……」

恭子が道端で貧血を起こした事は、心配をかけないように坪井には話していなかった。

マサルさん、ちゃんと食事してるのかな？

車の中でマサルのところの冷蔵庫を思い出し心配し、コンビニで真剣な顔で立ち読み

していたマサルを思い出し、エロ本を思い出し、恭子は一人百面相をしていた。

「恭ちゃん、表情の練習してるの？エライねえ」

坪井に言われ恭子は我に返り俯いたが、またマサルを思い出していた。

(3) 友達登録完了

坂井恭香こと坂井恭子は、19歳でスクリーンデビューした。

20歳の時出演した時代劇映画「おとつつあ〜ん」で、準主役ではあったが

顔のかわいさと、演技の高さを評価され若手女優として人気を得ている。

最初は映画ばかり出ていたが、最近はテレビドラマにも出演するようになり、

人気は高まる一方だった。

所属事務所は業界内では大きな力を持っている「ネクスト・プロダクション」だ。

俳優・タレント、歌手、など多くの芸能人が所属している。

恭子はまだ若手だがネクスト・プロでは稼ぎ頭の一人に加わっている。

この日、恭子は久しぶりのオフで、一人本屋に来ていた。

本屋に置いてある検索機の前で目的の本を調べていた。

はああ、やっぱり本名で出していないのかなあ。無いや…

「スガノマサル」という作家名は検索しても出てはこなかった。

「スガノ」や「マサル」では出てくるが、どれかもわからず結局見つけれなかった。

しかたなくファッション誌を一冊買い、本屋を出た。

自宅マンションに向う途中、インテリア雑貨とカフェが合併している店がある。

カフェは通りに面しているが、片道一車線の車もあまり通らないよ

うな静かな所なので、
オフの日いつもそこでお茶を飲んでいる。
今日もテラス席に座り、秋の暖かい陽射しの中、買ってきた雑誌を
テーブルに乗せ
パラパラとめくっていた。

読んでいる雑誌に当たっていた陽射しが、急にさえぎられた。
恭子が少し頭を上げるとテーブルの前に誰かが立っている。
そのまま顔を上げると

「よっ！」 マサルだった。

「こ、こ、こんにちは……」 どもりながら挨拶をした。
さっきまで本屋でこの人の本を探していたが、結局見つからずあき
らめてカフェで雑誌を
見ていた。そんな中、現れた本人に恭子は少し慌てた。

「お茶かあゝ、優雅でいいね〜」 マサルは突っ立ったまま言い、
「んじゃ！」 と
立ち去ろうとした。

恭子はドキドキしながら
「一緒に、一緒にお茶…飲みませんか？」 思い切って言った。
「ん？んー、いいや。俺、金ねーから〜。んじゃ！」
マサルは片手を上げて笑った。

「あつ、あ、わ、私ご馳走します！」
恭子は立ち上がってマサルを引き止めた。
いつになく積極的な自分に恭子自身が驚いていた。

「えーまじまじー？じゃ、座ろつとー！」 マサルは恭子の隣

に腰をかけた。

「……」

隣に座られた恭子は少し顔が赤くなった。

「あつ、俺、ココアにしよつと」

「何か…何か食べますか？ここサンドイッチとかパスタもおいしいの」

マサルのお腹の空き具合を心配して聞くと、

「ええ！！いいのー？じゃあね」

マサルはメニューを見ながら（たらこイカいくらパスタ）と（カツサンド）を頼んだ。

マサルには遠慮と言う言葉は存在しないらしい。

「今日、平日なのに仕事は？OLだろ？」 マサルの問いに一瞬あせったが

「…今日は…設立記念日なの！会社の設立記念日で休み！！」 恭子は適当に言った。

「へへ、そうなんだあ」 マサルはさして疑問も持っていないようだ。

今度は恭子が聞いた。

「マサルさんは？何してたの？」

「ああ？俺？散歩！」

「散歩？」

「あん？コイツと一緒に…」

マサルは左斜め上を指さし、恭子はその空間を見た。

「へっ…？」

「小蠅と」

マサルの左斜め上には、小蠅が一匹軽やかに回転していた。

「なんかさあ、家出てフラフラ散歩してたら、着いてくんだよ、コイツ……」

「……はあ……」

恭子は口を半開きにしてポカんとマサルを見ていた。

「俺、臭いのかなあ？3日くらい風呂入ってねーからなあ。もう寒くなってきたから

家の風呂入るのも寒みーし、銭湯は遠いし高いから4日に1回くらいしか行かねーし！」

マサルのいう「家の風呂」はアパート敷地内の水道のことなので「水」しか出ない。

秋から冬の間、「家の風呂」に入るということは拷問に近い。

よって、夏が終わると次の初夏まで「風呂」は封印される。

風呂が封印されている間、バイトが終わると地元駅を挟み、マサルの家とは逆方面に

住んでいる友人宅の風呂を借りているが、その友人は今一週間の海外出張でいない。

帰ってくるのは三日後だ。

「臭うかなあ〜？」 マサルはそう言うと、恭子の鼻先に自分の腕をつけた。

ビックリした恭子だったが、子供のような無邪気さのマサルに恭子は笑顔になり

「うっん、臭くない……」 と答えた。

パスタとサンドイッチが来るとマサルはおいしそうに食べ始め、たまに通り過ぎる人に

（坂井恭香だ……）とチラチラ見られていたが、そんなことにも気づかず恭子は緊張しながら

一生懸命話をし、楽しい時を過ごした。

空が少しだけ朱色になった頃、席を立ち、途中まで一緒に家路に向かった。

マサルは道の曲がり角に來ると、

「じゃ、ごちそうさんでした。俺こっちだから」とアパートの方を指さした。

「…よかつたら！よかつたらお風呂、貸します！…けど…」

恭子はまた自分の大胆な発言に驚きつつマサルを見た。

「まじ?!…いやいや、やっぱそれはダメだ。女の子の部屋に入るのもためらうが」

風呂を借りるなんて、それはできん!うん!

マサルは腕を組み、自分でうなずきながら恭子に言った。

「だ、大丈夫です…お風呂場、カギかかるし、私襲わないから!それに、まだいるし…」

マサルの真上に飛んでいる小蠅を指さした。

恭子は自分でも何を言っているかわからないが、マサルに風呂を貸したいらしい。

マサルは自分の頭の上を見て小蠅を追い払い、

「い、いいの…?じゃ、お言葉に甘えて!あつ、恭子に襲われるなら俺別にいいよ」

恭子はマサルの言葉に赤くなつたが、その頬の赤さは夕日に馴染んでマサルには気づかれなかつた。

恭子のマンションは3階建てのセキュリティがしっかりした高級マンションだった。

2LDKのその部屋はリビングが広く、ゆったりとしたソファセツトが置かれ

オレンジとグレープフルーツを混ぜたアロマオイルのいい香りが漂っていた。

「すげーな、OLってこんなとこ住めんだあ。やっぱり俺もOLやる
ーかなあ」

マサルがブツブツ一人言を言っていると

「シャンプーとか勝手に使っていていいですから」 恭子がバスタオルを渡した。

「おう、サンキュー。あつ、おまえ、覗くなよ俺のナイスバディ」
赤くなる恭子を残し、マサルは鼻歌まじりにバスルームへ入って行った。

男性がこの部屋に入ったのは、マネージャーや事務所関係者以外ではマサルが初めてで

ある。マネージャーの坪井にバレたら大変だ。

まして、風呂を貸したなどと言ったら恭子の身は24時間体制で管理されるであろう。

坪井はスキヤンダルをもっとも恐れている。

「スンゲーさっぱり気分だぜい！」 マサルがシャワーから出て来ると、

ソファに座りテレビを見ていた恭子がマサルの声で振り返った。

「キヤー……」

マサルは上半身裸で首からバスタオルをかけていた。

「んなつ、なんだよ…風呂上りは暑いからしょうがねーだろ…」

そのままマサルはソファにドカッと座った。

恭子は目のやり場に困って「な、なにか…の、飲む？」立ち上がりキッチンに向った

恭子の背中に「水でいいや〜」マサルが言った。

恭子は俯きながら冷たいミネラルウォーターをマサルに渡した。

「うめえ〜この、水。俺んことえらい違い！」

マサルは水のお代わりをした。

恭子が、マサルの出版されている小説について聞いてみると、マサルのペンネームは「かんの ゆう」といい、純愛小説を書いているということがわかった。

純愛…小説…？

恭子は心の中で少し笑ってしまった。

マサルは背が高く、がたいも良い。顔も身なりをちゃんとすればそこら辺の男性より

遙かにいい男だが、中身はがさつなのか子供なのか、わからないつかみどころのない

人間だ。そんなマサルがどんな純愛小説を書いているのか、やはり恭子は読んでみたい

と思い、翌日、撮影の合い間に本屋に行こうと考えた。

マサルが壁にかかっている時計を見た。

「いけね、こんな時間になっちまった。これからバイトなんだ。恭子ありがとな、」

助かったぜ、風呂！」

マサルは立ち上がってTシャツに綿のシャツを羽織ると借りたバスタオルを丁寧にたたみ

恭子に渡した。

「また、来てもいいよ…お風呂…」

「え？うん、サンキュー」 マサルは口角を上げて笑った。

「あつ、そうだ。俺の携帯番号…恭子の携帯貸して」

恭子はマサルに自分の携帯を渡した。

マサルは自分の番号を押し、そのまま返した。

「登録しとけよ」

「私の番号…」

「いいよ、恭子の気分が向いてその番号押したら、その時恭子の番号がわかるから」

マサルはそう言い、部屋を後にした。

恭子はマサルを玄関で見送り、携帯に残された番号を登録した。

名前「スガノ マサル」 グループ「友達」

マサルは久しぶりの入浴で身も心もさっぱり気分で居酒屋「ピヨンピヨン」に向った。

頭の上の小蠅は、もう飛んでいない。恭子の家に置き土産にした…

らじい...

そのころ、恭子は部屋の中で小蠅と戦っていた...

(4) 眠れる小説

ロケ収録の合間、食事時間に入り、今回のドラマの共演者で相手役の広瀬一也に声をかけられた。

「恭香ちゃん、一緒にお弁当食べない？」

広瀬の誘いに坪井の目が光った。

共演者なので邪険にできない恭子は、微笑みながら丁寧に応じた。

広瀬は残念そうな顔をして自分のロケ車に戻っていく。

「恭ちゃん！」 その様子を見ていた坪井がよしよしと、恭子に向かって真顔で

Vサインを送った。

恭子もうなずきながら坪井にVサインをした。

広瀬は28歳で女性からの指示を100%受けている人気No.1の俳優だ。

その広瀬と坂井恭香が共演するとあってドラマの視聴率獲得に関係者の期待は高まっている。

広瀬一也は坂井恭香に好意を抱いていたが、坪井がすかさずキャッチし、

寄せ付けないようにしている。

業界関係者の間で、広瀬の女性関係の話でいい噂は聞こえてこないからだ。

「絶対仕事以外では近づけないように」と事務所からも強く言われている。

恭子は急いでロケ弁を食べ、残った時間を利用して撮影現場に一番近い本屋に行った。

4冊出しているって言ってたよなあ。

自分では見つけれず、店員に尋ねると2冊は見つけられたが残りの2冊は取り寄せになると言われ、次はいつ来られるかわからない場所のため、

見つかった2冊だけを購入した。

恭子は大切に本を抱えてロケ車に戻り、さっそく本を取り出した。

「あれ？恭ちゃん、小説なんかも読むんだ」

坪井に言われた。

「うん、ちょっと読んで見たくなったの」

恭子は表紙の「かんの ゆう」という文字を見ながら答えた。

「じゃあ、今度からプロフィールの趣味のところに（読書）も加えておこう」

坪井のそんな言葉は耳に入らず、表紙をめくった。

読んでいる途中で撮影再開の合図が入り本を閉じたが、

む、難しくて…わかんない。

恭子の素直なマサルの小説に関する感想だ。

時代設定が戦国時代、その中の恋愛物語なのだが、言い回しが難しい。

売れないのは、それだけ今の時代にはそぐわない内容なのかもしれない。

撮影が終わり、広瀬に食事に誘われたが、これも微笑みを付け加え丁寧断った。

広瀬は「なぜ自分が食事に誘っているのに断られるんだ」と疑問に思っている。

恭子と坪井は現場をそくさとあとにした。

「しつこいね」広瀬君。恭子ちゃん、スキヤンダルはご法度だからね！男なんて部屋に

呼んじゃダメだからね！」

「…はい」

坪井に念を押され、恭子の頭に浮かんだのはマサル顔だった。

自宅に着き、シャワーも浴びずにすぐさま本を取り出し、最初から読んだ。

が、すぐに睡魔に襲われ、寒さで目を開けたら深夜2時を回っていた。

湯船にゆつくり浸かり、ベッドに入り、また本を読み始めた。

2分で寝れた。

この後、恭子は寝付けないときはマサルの本を読んでいる。

5分で爆睡に落ちる。

そのため先に進めず、1冊も読破できない魔法の本だ。

不眠症で悩んでいる友人が何人かいて、マサルの本を勧めた。

友人たちから何気に感謝され、複雑な気持ちもあったがマサルの収入に少しは

貢献している恭子であった。

(5) 必死なお誘い

マサルの携帯番号を登録してから3日が経った。

テレビ局の楽屋にいる恭子は、何度も携帯を開きマサルの番号を示すが電話を

掛ける口実が見つからない。

シャワー使いますか?…うっ、ダメだわ、そんなこと言えない。

この間は誘ったものの、思い出すと自分の発言に恥ずかしくなる。また携帯を閉じた。

坪井が楽屋に入ってきた。

「恭ちゃん、来週の月曜日なんだけど急にスケジュール変更になっちゃって

月曜日はオフになるから、よろしくね」

「そう……」

恭子は少し考えて

「あっ、ちよつとトイレ行ってきます」 と楽屋を出た。

人気のない場所を見つけて、ドキドキしながら思い切ってマサルの番号を押した。

5コール鳴っても出ない。

バイト中かなあ……。でもバイトは夜だけって言ってたよね……。マサルがコールに出ないことに少しホツとしながら、切ろうとした時、

「もし…もし…」

ねぼけた声のマサルが出た。

「…も、もしもし！」　あせった恭子の声はものすごく大きかった。

「うわあ、デケー声ださなくても聞こえてるよ。誰だよ！」

「きよ、恭子です！」　また大きい声を出してしまった。

「…ぶつ、なんでおまえそんなに声大きいの？」

恭子は腹式呼吸だった。女優なので…。

「ご、ごめんなさい。寝てました？」　時間的には午後2時だ。

「んあ？んー、なんか小説書いてると、たまに寝ちゃってる時があるんだよね」

マサルの本を読んで読者が寝てしまうように、執筆している本人も寝てしまうようだ。

自分の小説の所為だと、マサルはきつと一息気がつかないであろう。

「あつ、どうかしたかあ？」

「あ、あの、げ、げ、げ、」

電話越しとは言え、耳元から入ってくるマサルの声に恭子の心臓はドキドキしていた。

「げ、げ、げ」　恭子は（げ）しか言っていない。

「げげげ…って、おまえは妖怪かー！なにかようかい？なんちつてえ。」

で、「げ」が、どうした？ん？

「……………」

マサルのくだらないギャグは無視して恭子は言った。

「げ、月曜日！ひまだったら…ご、ご飯行きませんか！私ご馳走しますから！」

恭子は言った後、胸を押さえた。

はあ、言っちゃった。

「月曜日？おごり？！いいよ！バイトも休みだし」
マサルの返事にホッし、月曜の夜会う約束をした。

それから4日間恭子はご機嫌で、共演者の広瀬の問いかけに対しての微笑返しは

いつもの倍以上になり、広瀬を勘違いの夢の世界に放り込んだが、
残念なことに広瀬の
思いは叶う事はない。

(6) デ、デート…

待ちに待った月曜日 came。
約束の時間は5時。

あゝ、まだ3時30分だあ…

オフ日の恭子は、すっぴんで楽な服装で過ごしているが、今日は少し気合を入れた。
なぜ自分がこんなにドキドキしてウキウキしているのか、不思議な感じを覚えながら
仕度をして時間までソファに座ったり、鏡の前に行ったり落ち着かなかった。

4時50分に恭子はマサルに電話をする。

「もしもし！」 また大きい声だった。

「今日も元気がいいなあゝ、おまえ…」

「も、もうすぐ家出ます！」

マサルのアパートの方が駅寄りなため、先に恭子が部屋を出る。

恭子のマンションから駅に向う途中の脇道を曲がると、マサルのアパートに続く。

その曲がり角で、マサルと落ち合う約束だ。

恭子は電話を切るとすぐに家を出た。

約束どおり曲がり角でマサルが待っている。

「恭子、なんかすんごい気合入ってるなあ。化粧ばっちりだし。な

んか芸能人みたいだなあ」

「えっ…、そ、そうですか？」

目立つちゃってるかしら？ヤバイかしら…。

今更遅いのだが、前髪を下に下げる仕草をして顔を隠そうとした。

「今日の俺、決まってるだろ？髭もちゃんと剃ったんだぜ！ほれっ
！」

髭を剃ったからといって威張ることもないが、マサルは顎を擦りながら恭子に言った。

マサルさん、そういう服持ってたんだ…ちょっと一般人とい
うより…

マサルの格好は、ダーク系のスーツにネクタイは締めず、黒ベース
に少し柄の入った

シャツを着ていた。マサルはがたいもいい、背も高いく見栄えはい
いが、その出立ちは
夜の人だった…

二人は住宅街を抜け、駅に向い歩き始めた。

「何食うの？」 マサルが聞く。

「マサルさん、なにが食べたいですか？」

「何でもいいよ、恭子が食いたいもんで！そうだ、恭子さあ、マ
サルさんって

“さん”つけやめろよ。恥ずかしいから。マサルでいいよ
「えっ…」

マサルの言葉に戸惑ったが

「ほれ、言ってみなよ。マサルって」

マサルは友人知人には、呼び捨てにさせている。かしこまった言い方で呼ばれるのを嫌っていた。

「ほらっ」

「マ、マ、マサル…さん…」 恭子は小さく“さん”を付けた。

「あんだよ、それ…」

マサルはズボンのポケットに手を突っ込んだままガクリツとうな垂れた。

「はい！もう一回！」

「マ、マサル…」 恭子の声は小さすぎた。

「ああ？聞こえねーよ。はい〜もう一度」

「……サル！」 (マ) が小さすぎたらしい。

「…サルだけは、やめてくれ…」

二人はこんなことを繰り返して駅に着いた。

結局、食事は隣駅にあるマサルの友人がオーナーであるレストランに行くことにした。

恭子たちの地元駅は、急行も特急も止まらないが、隣の駅は雑貨やインテリアの

店が立ち並び、「住みたい街ベスト5」に毎回入っている。

マダムや若い女性に人気のある街で、おしゃれなレストランも豊富にある。

隣街の駅に着き、10分ほど歩いた静かなところに店があるとマサルに言われ歩き始めた。

電車に乗っていても、レストランに向かう途中もチラチラ街行く人の視線を

感じたマサルは、綺麗な恭子と自分がアンバランスなのかと勘違いしていた。

やっぱりこんな格好じゃダメだったか…恭子綺麗だもんなあ…

レストランの前に来ると恭子は少し驚いた。

そこは、一軒家を改装したフレンチレストランだった。

どう見ても普段のマサルとは噛合わない、おしゃれで高そうな感じだ。

「ここ！」

マサルはそう言うツツカツカとレストランに続く石畳を歩いていく。その後ろを恭子は追った。

店に入り、受付のスタッフに挨拶をすると、マサルより少し年上で落ちついた雰囲気のおーナーが出てきた。

「いよつ！宮元ちゃん、悪いね。予約無しで来ちゃったよ」
マサルが宮元に言った。

「おやおや、今日はちゃんとした格好して…女連れかよ。おまえが貴子以外の女とここに

来るなんて久しぶりじゃないか？」

宮元はマサルの頭をちょこつと突っついた。

貴子…さんつて？

恭子は女性の名前を聞き、少しドキリとしたが、たずねることも出
来ずマサルの横に
立っていた。

「こいつ、恭子。なにかと世話になってるんだ！」

宮元に紹介した。

「こんにちは。坂井と申します」 恭子は頭を下げた。
「えっ？あつ、オーナーの宮元です。マサルがお世話になっている
ようで」

宮元は坂井恭香と気づいたが、マサルとは長い付き合いなので、

あゝあ、きつと、マサル知らないんだろうなあ…彼女のこと
と、感を働かせ挨拶だけをし、中庭に面したあまり目立たない隅の
席へ案内した。

「今日はどうする？」 宮元がマサルに聞き、

「恭子、なんか食えないもんある？」 マサルが恭子に聞いた。

「なんでも食べられます」

「じゃ、宮元ちゃんにまかせる。食事も飲み物も」 マサルは宮
元に告げると

「OK！じゃ食前酒からご用意させていただきますね」

恭子の方を向いて笑顔で言い、厨房へ入って行った。

「なんか、マサルさん、マサルがこんなステキなお店知ってるなん
て、不思議」

恭子は店内を見渡しながら言った。

「不思議…って、俺、キャベツしか食ってないみたいじゃないかよ
…まっ、こういう店は

ここしか来ないけどな。宮元の店だし。恭子とデートだから連れ
て来た」

デ、デート？！

マサルの「デート」という言葉に恭子は頬を赤くした。

店内はそれほど明るくはないのであまり顔色もわからない。が、
「あれ、恭子まだ酒も飲んでねーのに顔赤いぜ。」

あつ、もしかして俺に酔っちゃったとかー！」
マサルは笑いながら言ったが、恭子の頬の赤さは耳までも真っ赤にした。

食事が始まり、こういうレストランに不釣合いな普段のマサルからは想像できないスマー

トできちんとしているテーブルマナーに恭子は驚いた。

鍋を食べた時、カフェでパスタを食べた時のマサルとは全然違っている。

残念ながら会話の中身はいつもどおりのマサルであった。

恭子は恋をしたことがないわけではない。

高校生の時には一応付き合っていた同級生の彼氏もいた。

その恋も卒業と共に終わり、女優になってからは事務所の目が厳しくて恋だの愛だの

そついう世界は今のところNGである。

言い寄ってくる男も多いが、恭子の心を惹くような人には出会っていない。

ただ、マサルは他の男と違っていた。

恭子を恭香と見ていないことも大きい。恭子に対しても気取らず接している。

そんなマサルと一緒にいたいと思う気持ちは、どんどん大きくなるばかりだ。

今、目の前にいるマサルと過ごしている時間に幸せを感じていた。

2時間半ほど食事を楽しみ、恭子がレストルームにいくため席を立つと宮元がマサルの

テーブルに来た。

「マサル、どこで知り合った？彼女と興味津々で聞いてきた。」

「ああ？家が近所だった。たまたま知り合ったんだ。宮元ちゃん手出すなよな。」

「おまえ、手エ早えからなあ。彼女そついう女じゃないからな！」

マサルは心配そうに言った。

「あほつ！誰がマサルの女を取るかよ。で、どこまでいったんだ？彼女とは、ん？」

「はあ？そんな関係じゃねーよ。友達だよ友達。俺みたいな貧乏人あんな綺麗な子が」

相手にしてくれるわけねーじゃん」

マサルが言うと宮元は口元だけで笑い、

「お友達ねえ。じゃ、そのお友達を連れて来たということ、今日の食事代は半額にして」

「おいてやるよ。どうせ、おまえ金ないんだろ？」

宮元は目を細めて言った。

「えっ？いいよ、今日はバイト代も入って少しは楽しんだ」

マサルは遠慮気味に言ったが、

「いいっていいって！その分は次のデートに回せ。なっ！」宮元はマサルの肩を叩いた。

「ラ、ラッキ。ありがとう、宮本様！」

「こういうときだけ“さま”を付けるんじゃねーの」

マサルがテーブルで会計を終えると恭子が戻ってきた。

「ごめんなさい、おまたせして」

「んじゃ、行くか」

恭子とマサルは席を立ち、出口に向った。

ドア横には宮元が立っている。

「お会計は、あちらでいいですか？」 恭子はそう言い、レジのところに行こうとしたが、宮元がすかさず言った。

「頂だいたしておりますので」

「えっ」 恭子はマサルの顔を見た。

「ごっとうさん！じゃまたな！」

マサルは宮元に向かい手を上げ、恭子の肩を押し、宮元の開けたドアを出た。

「本日はありがとうございました。またのお越しをお待ちしております」

宮元は丁寧な顔を下げ、顔を上げ満面の笑みで二人を見送った。

「えっ、マサル…お会計…」

「今日は俺のおごりだ」 マサルは店を出たところで言った。

「でも、私が誘ったし、ご馳走する約束だし…ここ…高そうだし…」 恭子はマサルのお財布の中身を心配した。

マサルは最初から恭子にご馳走になるつもりはなかった。

恭子からの誘いの電話を貰ったときからそれは考えていた。

「気にすんなよ。デートで女に金なんて出させるわけにはいかねーだろ？」

それにバイト代入ってるしさっ。ついでに宮元にまけてもらったから大丈夫！」

マサルはそう言い、

「ほら、行くぞ〜」

「でも…」

「いいってば。今度また俺んちで鍋作ってよ、霜降り肉入りで！もう冬に近づいてるし。」

鍋の季節に突入するしさっ」

マサルはやさしく笑って、立ち止まっている恭子の手を引っ張り歩き出した。

て、手——！繋いでるうううう。

恭子は動揺したが、マサルの大きな手が離れるまで繋いでいようと思っただ。

その手は駅の近くなっても離れなかった。

「ね、歩いて帰ろうか」　マサルは手を繋いだまま言った。

電車は一駅なので3分もかからないが、歩いて家まで帰ると20分はかかる。

恭子は繋いだ右手にほんの少しだけ力を入れて握り返し「うん！」と

大きな声で返事をした。

気がついた。

繋いだ手から伝わってくる大切な気持ちに。

私、マサルさんが好きなんだ…

店が連なる道を歩き、長い坂道を登って、大きな通りを超え、また坂道を下り、遊歩道を歩いた。

「春になるとさあ、この遊歩道の桜並木スゲーきれいだよなあ、恭子知ってるだろ？」

「うん。私は一度もお花見したことないけど、近所の人たちが集まってお花見してるよね」

恭子は枝だけになっている桜の木を見上げて言った。

「じゃ、来年の春は花見しよう、弁当持ってきて！おまえ弁当作れよ」

「うん！」 恭子はうれしそうな顔で返事をした。

「おまえの返事、いつもデカイよなあ。ははは。あっ、弁当には肉入れろよ。」

霜降りの肉！

「うん」 少し小さめの声で返事をした。

本当なら20分ほどの道のりを、二人は寄り道しながら帰り、マサルが恭子をマンションの

下まで送り届けたときは1時間ほどかかっていた。

「お茶…飲んでいく？」

恭子は聞いた。

「んー、今日はいい。遅いし、恭子明日仕事だろ？OLって朝早いんだろ？」

「うん…早い…かな？」

OLの人が何時に出社なのか、OL 経験がない恭子にはわからないが、

一応、翌日は早朝ロケが入っているため、朝が早いということは間違いではない。

「今日はごちそうさまでした」

「おう。またなんか食いに行こうな！」

「はい！」

恭子は笑顔でエントランスを入っていった。

マサルはそれを見届けて自分のアパートに向った。

この日から、マサルの原稿料が入ると二人で少しだけ贅沢なものを食べに出かけたりした。

二人で出かけるとき、恭子は目立たないように気をつけた服装を選んでいた。

ドラマの撮影で恭子のスケジュールは、まる一日オフというのは少なかったが、

マサルのバイトがないときは、仕事が終わってからご飯を作りに行ったり、

平日がオフの時は、「日曜出勤したから平日振り替えて休みを貰っている」と嘘をついた。

それでもマサルは別段気にするわけでもなく、恭子がアパートに遊びに来る日を楽しみに

していた。食材を持ってきてくれることもうれしかったが、恭子に会えることの方が数倍うれしい。

それは恭子も同じで、マサルと会う日の仕事は早く終わってほしくて、

共演者がNG など何度も出したら睨みつけ「普段やさしい坂井恭香は仕事に厳しい」と

というイメージを持たれた。

恭子がアパートに行くと、マサルはいつも小さいちゃぶ台の上に原稿用紙を広げ、小説を

書いている。

恭子が料理を作り終え、振り向くとたまにちゃぶ台に伏せて寝てしまっていることも多かった。

「やはり、自分で書いても寝てしまうような小説は売れない……」
恭子はそう思いながらも、小説を書いているマサルの姿が大好きだった。

近くのお寺のイチヨウの木もギンナンを落とし、地面を黄色い絨毯にすると

マサルの部屋のちゃぶ台がコタツに変わる季節がきた。

(7) 恭子と恭香

居酒屋「ピョンピョン」の開店前、スタッフルームの窓際近くでマサルと店長が話をしている。

店長、なんですか？用って…

実は妻と子が家を出て行った。

ええ?! どうして!

君のせいだ。マサル…

俺…? ですか?

実は、僕は…僕は君を愛しているんだあ。それが妻にばれたあ。

店長…俺も、店長が好きです!!

マサル!

店長おおおおお。

「…ちよつと富美ちゃん、ふうみくちゃん」

雑誌を読んでいた美和が、マサルと店長をジーンツと見ている富美恵を揺すつた。

「…ん? んあ? 美和ちゃん、なによ! 今いいところなのに!」

富美恵は口を尖らした。

「あのさあ、勝手に店長とマサルのアフレコすんのもいいんだけど、傍から見ると

やっぱすごく気味悪いよ…富美ちゃん。ブツブツ一人で言って…」
残念なことに美和は腐女子の気持ちをはわかってくれない。

「あゝ、やっぱいいわああ、大人で、カッコイイ男同士…」

二人がテーブルでゴニョゴニョ言っているとマサルが戻ってきた。

「ねえねえ、店長となんの話してたのおお?」

富美恵が目をキラキラさせて聞いてきた。

「な、なんだよ、富美ちゃん。気持ちわりーなあ」

マサルは富美恵の目にビクついた。

「ねーねー、なんの話だった？愛の告白とか？店長の嫁さん家出したとか？」

富美恵は座っている椅子をズブツと引きずりマサルに近寄った。

「ハア？なんの話だよ、それ。店長にこれ貰ったんだよ」

マサルが見せたのは水族館の手ケットだった。

「ええ?!店長と行くの?!ねーねー!」

「違うよ!彼女と行って来いって、くれたんだよ。なんで店長なんだよ…!」

マサルは椅子を少しずらし富美恵から離れながら言った。

「なんだあ、つまんな〜い。マサルと女の人のツーショットなんてつまんな〜い」

富美恵は椅子の背もたれに体を預けて頬を膨らましてマサルを睨んだ。

「なんで俺がおまえに睨まれなきゃなんなんだよ。つたく。醜醜体!」

「醜醜体じゃないっていつてるでしょ!!腐よ!腐!!!」

ブンブンしはじめた富美恵をほって置き、マサルは恭子にメールを入れた。

(次の休みいつ?水族館のただ券を貰った!)

丁度ロケ車の中にいた恭子はすぐに返信をし、

(日曜出勤だから15日の平日がお休みだけど、いい?)

二人は15日に水族館に行く約束をした。

メールを終えデートの日が決まり、ウキウキのマサルは美和の見て
いる雑誌を覗いた。

「女ってそういう雑誌好きだよなあ、ファッション誌なあ」

「マサルの彼女だって読んでるでしょ？こついうの」

美和は雑誌から目を離さずに言った。

「……………えっ?!」

マサルはいきなり、美和の読んでいる雑誌を奪い取った。

「ちょ、ちょちーなにすんのよ、人が見てるのにい」

美和が取り返そうとしたが

「え、ええー!」

マサルが大きい声で雑誌を見ながら叫んだ。

「?」

「?」

美和と富美恵は顔を見合わせたあと、マサルを見た。

雑誌の中には坂井恭香の特集が組まれている。

「これ、これ…これって…」 マサルは眉間にしわを寄せ雑誌を
見つけた。

「ん?坂井恭香だよ?人気あんだよね、この女優さん」

「マサル知らないんでしょ?坂井恭香って」

美和と富美恵が言うと、

「美和、この雑誌、100円で売ってくれ!」

「ひゃ、100円って、これ500円もすんのよ!ー!やーよ。マサ
ル自分で買いに行きなさいよ」

断られたが、

「じゃ!この雑誌、貸してくれ!」

「ああ?やーよ、さっき買ってきたばかりだもん」

また断られ

だが、

「じゃ、くれ！」 マサルは恭香の写真をみたまま言った。

「……」

美和はどっちみち貸しても返ってこないような気がして

「……ん、もあー。わかったわよ。あげるから！ちよつとだけ返してよ。」

マサルが帰るとき持ってっていいからさあー」

美和はそう言いマサルから雑誌を取り上げ、再び見始めた。

マサルが仕事を上がり、スタッフルームに戻るとテーブルの上には、先に仕事を

上がった美和から、

「付録の小冊子は持って帰るからね！これを見て少しはファッションのお勉強でも

してくれ！ 美和」

と、メモ書きと共に雑誌が置いてあった。

マサルは美和に感謝しつつ雑誌を持って、いつも寄るコンビニでのエロ本の立ち読みもせず、真直ぐと急いでアパートに帰った。

部屋に入ると、上着も脱がず、コタツの上に雑誌をのせ、坂井恭香のページを開いた。

8ページの特集で「女優という仕事について」「恋愛について」などが書かれてあり、

「最近のマイブーム」の質問には、

（読書、ある人の小説を読んでいると、しあわせな気持ちになって、

すぐに寝むれる…)
と書かれている。

マサルは恭子のプロフィールが簡単に書かれてあるところを読んだ。
「坂井恭香」「女優」そのあとに「主な出演作品」と「ネクスト・プロ所属」と

記されている。

本名は載っていないかった。が、間違いなく坂井恭子だ。

マサルは「ふっ」と笑い、「坂井恭香、女優、ネクスト・プロか…」と

一人言を呟くように言つと雑誌を閉じた。

「どうしよう…」

コタツに入ったまま寝転んで低い天井をずっと見続けた。

(8) 白いイルカ

恭子は目立たないように地味な服を選び、薄い化粧をし、前髪を下ろし眼鏡をかけた。

本当はもっとおしゃれをして行きたいが、目立ってファンに声を掛けられたり、

ジロジロ見られたりするよりは地味な姿でも、マサルと二人で普通にデートをする方がよっぽどいい。

それでもやはり、線の細さや肌の美しさで人目を引いてしまう。

家を出るとき恭子は携帯を押す。

2回のコールのあと、「おう！」マサルの声を聞く。

「今から家出るよ！」恭子の声はうれしそうだ。

「じゃ、降りてくよ」

マサルは携帯を切るとダウンを着ながら靴を履く。

いつものように恭子からの電話でマサルは家を出る。

そしてマサルがアパートを出て、駅に向う最初の曲がり角のところで恭子と会える。

今日もまたそうして曲がり角のところで会い、二人が初めて会った坂を下り、駅へ向かう。

目的地は神奈川にある水族館。店長から貰ったタダ券でデート。

二人は電車を乗り継ぎ、1時間30分ほどで水族館に着いた。

恭子が一番会いたいののは「白いイルカ」。

360。見渡せる水槽につくと真っ先に走って行く。

「おいおい、子供じゃねーんだから……」

マサルは呆れながらも恭子の嬉しそうな顔を見ていた。

「すごいね、かわいい〜ほしい〜」

恭子はジーーーっと白いイルカを目で追いつけた。

「飼えねーし、買えねーし、金ねーし…おっ、このフレーズ今度の小説に使おう！」

マサルはいきなりメモ書きを始める。

「ほら、ちゃんと見なよ！こっち来たよ！や〜ん、かわいいいいい」

恭子はマサルのダウンの袖を引つ張った。

近くに来た白いイルカは、恭子たちの前に来て首を振った。

マサルは一緒に首を振っていたが

「あつ、なんかコイツ柔らかさそうで美味そう…マジ美味そう…味噌煮か…？」

マサルが白いイルカを見てボソボソと言うと、

「えっ…」

イルカは恭子たちの前から離れ、子供たちがいる方へ行ってしまった。

「あつ……」

恭子は黙ったままマサルを見た。その顔は怒っている。

「お、俺？俺のせい？んなわけねーよな！恭子があんまし見すぎるから恐がって行っちゃ

ったんだよ！きつと！だははは、違うの見に行こうぜ。ほら、ペンギンもいるしさっ！

あつ、鰯の大群もいるらしいぜ。鰯は骨まで食べるんだぜ！すげーよな、栄養満点だよ！

りっぱな魚だよなあ〜いわしい…」

マサルは恭子の目に怯えながら一人で話し、恭子の首に腕を回し促しながら移動した。

二人はパーク内をあちらこちらと見て回り、食事をし、7時を過ぎた頃、

恭子が最後にもう一度白いイルカに会いたいと言い、再び360°の水槽に戻ってきた。

「恭子、ちょっと一人で見てる。俺、トイレ行ってくるから」

「うん、わかった。迷子にならないでね」 恭子はイルカから目をそらさず言った。

ふっ…

マサルはそんな恭子を見て目を細めながら、その場を離れた。

マサルが戻ってくると恭子と白いイルカが、ガラス越しに見つめ合っている。

「ほらっ」

恭子と白いイルカの間を、白いイルカが邪魔をした。

「…っえ？」

「ほら…」 マサルが白いイルカのぬいぐるみを恭子に渡した。

「一番小さいのしか買ってやれねーけど…」

「い、いいの…？ありがとう…」

恭子はぬいぐるみの白いイルカを見つめ、うれしそうな笑顔で、フカフカのぬいぐるみを抱きしめた。

マサルから何かをプレゼントされるのは初めてだった。

どんなに高価な物よりもうれしい。

水槽の中では本物の白いイルカが、首を振っている。

マサルはイルカと見つめ合い、お互いにうなずき合った。

うんうん、やっぱ、おまえ…美味そう…
そして、白いイルカは、やはり立ち去った…

(9) 冬空と涙

二人が地元の駅に着いた時には22時を少し回っていた。冬の晴れた夜空の風は頬を突き刺す。

マサルは恭子のマンションまで送るつもりだったが、アパート近くなり

「お湯でも飲んでく？」　　マサルが恭子の顔を覗きこむように聞いた。

「え？う、うん！」

恭子は、袋に入れてあるイルカのぬいぐるみを両手で抱いたままうなずいた。

「マサルの家、コタツがあるから好き！」

「コタツくらい買えよ。俺んところは、コタツしか！ないんだぜ」

なぜか自慢げなマサルに恭子は少し照れながら、勇気を出して言った。

「マサルの家に行けばコタツあるから、買わなくてもいいよ、私は！

それに…あの部屋には、マサルがいるから暖かいし…」

恭子の素直な言葉に12月の中旬だというのにマサルは暑くなり、ダウンの胸元を掴み

パタパタと扇いで体に風を送った。

アパートに入り、恭子がコタツを点け座った時、ドアがノックされた。

「ああ？誰だよ、いまごろ…」

マサルは水を入れようとしたヤカンを持ったまま、ドアに向って言った。

「誰？」

「あたし〜」

ドアの向こうから返ってきたのは明るい女の声。

恭子は思わずドアの方に顔を向けた。

マサルがドアを開けると「ちょっと〜、さっき来たらマサルいいし、コンビニ…」

女が靴を脱ごうと視線を下に落したとき、恭子の女性用の靴に気づき部屋の中を見た。

「あら？お客さんだった？」

その女が言うと同時に恭子は立ち上がって、イルカの入った袋とコートを掴んで下を向いたまま、「今日はありがとう。楽しかった…」
女の横で靴を履いた。

「恭子、お湯…」

マサルの言葉を遮るように恭子は、「ご、ごめんなさい。お邪魔しました」

と、女の顔も見ずに言い、

「おい！恭子〜、お湯〜」

マサルが引き止める間もなく恭子は出て行った。

「…私…ヤバかった？お邪魔だった？」
女は立ちすくんだまま聞いた。

「んー、邪魔だ…貴子、おまえ邪魔！来るなら電話してから来い」

マサルは女の額にデコピンをした。

「ごめ〜ん。さっきの人かわいいね、どっかでみたことある…誰だっけ？」

「ん？…ん、俺の…好きな人…」

マサルはそう言うとヤカンに水を入れガスを点けた。

「ちょっと、ちょっとー、婚約者の前でそういう告白止めてくんない？もあ。」

あつ、追いかけていいの？夜道危くない？

貴子は少し心配そうな顔をした。

「家、近いから…走ってちゃったし…」

マサルはコタツに入って台の上に顔を伏せた。

「ふ〜ん、そう。ご近所さんなんだあ、で、彼女とはどこまでいったわけ？」

貴子がマサルの頭を突っついて聞いた。

「水族館…」

マサルはコタツの上に置いてあるパンフレットを指さした。

「……あそつ……。携帯でも掛けとけば？私のこと誤解しちゃってるかもしれないし、

振られちゃうかもよ〜、なんかそういうところ鈍いのよね、マサルは！あのね、普通は

追いかけていくんだけど…鈍すぎー！！」

水族館のパンフレットを流し見している貴子は、呆れ声で言った。

貴子の言葉に不安になり、マサルはダウンのポケットに突っ込んでいた携帯を

取り出し恭子のメモリーを押しした。

コールしたと同時に、マサルの部屋の中でメロディが流れ出す。

「・・・？」

「…え？私じゃないわよ？」 二人は顔を見合わせた。

「ええ?!」 コタツの死角になっているところに恭子の鞆が置いてある。

マサルが携帯を切ると恭子の鞆から聞こえていたメロディが止まった。

「ええー！あいつ、鞆?!」

マサルは立ち上がりダウンを手に持ち、

「貴子、悪いけど帰れ！俺、恭子探しに行くから、おまえは帰れ！」

慌ててガスを止め、貴子を急かしてアパートを出た。

「あー、どうしよ…鞆忘れてきたあ。カギもない、小銭もない、携帯もないいいい」

戻るにも戻れないよなあ…マサルの…彼女…？そうだよ、貧乏でも顔いいし…いてもおかしくないよね、彼女くらい…。

私とは別に…何も無いもん…手しか繋いでないし。

「好きだ」とかも何にもない…もん。
マサルの…ばか。

マンションにも帰れず、マサルのアパートにも戻れず、彼女の存在にショックを受け、イルカのぬいぐるみだけを抱えて俯いた。

涙が落ちた。

(10) 捨て猫

マサルは貴子をタクシーに乗せ、帰した。

恭子、どこに行っただらう…金も携帯も持ってないはずだから

そんなに遠くには行けないはずだし…

マサルは、とりあえず恭子のマンションまで行き、部屋の明かりが点いているかどうか確認した。

点いてない…どこ行った…

マンションの回りも探してみたがいらない。

マサルの吐く息は白く、12月の夜、こんな寒空の下、外で過ごすには耐えられない。

マサルは、どんどん不安になっていく。

なぜあの時、追いかけなかったんだらう…

探しながらずっと自分を責める。

恭子が出て行ったときに言った「ごめんなさい」の意味が最初わからなかった。

貴子に言われた「鈍い」の言葉。

恭子を探しながら考えた。

ほんと、俺、鈍い。ちゃんと言葉にしないと、だめだ。

駅の近くのコンビニやゲームセンターなどを探したがどこにもいなかった。
ずっと走りつづけて探した。

40分ほど探し回り、駅とは反対側の家から10分ほど歩いたところにある公園の近くに
来た。

住宅街の公園といえども、ここは夜になるとホームレスの人が寝泊りに使っている。

マサルは一応、公園の中に入って見たが、ダンボールの家がいくつか並んでいるだけで
恭子の姿は見えなかった。

いるわけないよな……こんなとこ危ないし。

マサルが息を切らし、肩を落とし、別のところを探しに公園を出ようとした時、

「へっつくしゅん!!つとあ〜」

大胆なクシャミ。

女の声。

えっ?女?

少し先から聞こえてきたクシャミをした女のところに近づいてみた。

……う、うそだろ……

大き目のダンボールの中にスッポリと入っている女を見下ろした。

マサルは目を疑いつつも頭を掻きながら声をかける。

「き、きよ、恭子……?」

「んあ?」

その女は顔を上げた。

恭子はダンボールの中からマサルを見上げて、驚いたのかキョトンとしていた。

「マ、マサル…どうしたの…?!」

恭子だった。しかも手にはカップ酒を持っている。

マサルは恭子の目線に合わせしゃがんだ。

やっと、見つけた。

マサルは安堵の表情になり、自分の顔を手で覆いホツとすると急に笑い出した。

「ぶっ、はははは、なんか、違和感ない！」

「ええ？なにが？」

カップ酒をズズブーツと飲み干す恭子。

「箱の中、寒かっただろう？迎えに来たから…帰ろう」
マサルは恭子の頭をやさしくポンポンと叩いた。

「けっこうダンボールって暖かいんだよ。ほら、この子もいるし…」
恭子は白いイルカを袋から出して抱いていた。

「彼女…は？」 少し恭子は心配そうな顔で聞いた。

「帰ったよ…帰ってもらった」

マサルは微笑みながら言ったが、恭子の顔を見ると胸が絞られる思いがする。

「ほら」 恭子に手を差し伸べた。

マサルの手を握った恭子の手は、ものすごく冷たい。

「ごめん…」

マサルは心の中で謝った。

恭子は、朝になれば坪井がマンションまで迎えに来るので、それまでダンボールの中で

根性と気合とカップ酒で、イルカと共に過ごそうと思っていた。

「あつ、ちよつと待って」

恭子はダンボールをたたみ、近くにいたホームレスの人の所に持って行った。

「おじさん、ありがとうございます。ものすごく助かったよ、お酒もありがとう」

「おや、お嬢ちゃん、彼氏がお迎えに来てくれたのか？よかったなあ」

「あつ、どうもお世話になりました。ありがとうございました」
マサルは、そのおじさんに頭を下げた。

二人はアパートに帰る道のり、白い息を吐きながら話す。

「公園のブランコに座ってたらね、ダンボール貸してくれて、温まるからお酒も貰っちゃったんだ、いいおじさんだったよ」

「そっかあ、いい人でよかったな」

普通、女が、それも女優が一人でホームレスに紛れていくらなんでも

あんなところにいねーよな。それに酒貰って飲んでるって…
マサルは恭子のタフさを愛しく思った。

「彼女…大丈夫なの？帰っちゃったんでしょ？」

おまえが心配するな。

「彼女じゃないよ…」

「え？違う…の？」 恭子はマサルの顔をうれしそうに見た。

「…うん、違うよ。彼女じゃないよ。…ぶつ、クククツ…」
マサルは突然笑い出した。

「何よ、いきなり思い出し笑い？気持ち悪いわね！」

マサルはダンボールの中にいた恭子の姿を思い出していた。

「クククツ…」

「だからなんなのよ、気持ち悪いってばあ」

「俺…なんか猫拾った気分！」 また笑いがこみ上げた。

「何？猫って」

「恭子…」

「私？」

「だってダンボールの中にいたんだぜ、おまえ。捨て猫だよ、捨て猫！」

「ひ、ひどーい。私捨てられてないもん！」 恭子は顔を膨らませた。

「…ごめん。俺のせい…捨て猫になっちゃったの。俺のせい…でも、俺が拾った」

「ふふふつ、拾われたんだ私！」 恭子も笑い出した。

「そう、俺が…拾った！」

寒空の下、マサルは恭子の右手を握りしめ、自分のダウンのポケット

トに入れ、
温めるようにアパートにもどった。

(11) 好きと言った言葉

電気を消し忘れた部屋は、二人を明るく迎えてくれた。

コタツも点けっぱなしだった。

恭子をコタツに座らせ、マサルは1時間ほど前に沸かしかけて止めたヤカンを

もう一度火にかけた。

そして、まだ冷えきっている体をコタツの中で温めている恭子を後ろから抱きしめた。

恭子は一瞬ビクツとしたが背中に伝わってくるマサルのぬくもりをそのまま受け入れた。

恭子は、自分を抱きしめているマサルの腕に力が加わったことに我慢していた涙が

こぼれた。

「ごめん…」 マサルが謝った。

「え？」

「すぐに追いかけて…ごめん」

「…ううん、いいの。だって、見つけてくれた…」

マサル、私のこと、ちゃんと拾いに来てくれた…」

お湯が沸くまでマサルはずっと恭子を後ろから抱きしめていた。

お湯が沸き、台所に立ったマサルは、恭子に「好き」という言葉をいつ言おうか考えている。

マサルの性格だからなのか、貧乏者でも母性本能をくすぐられるの

か、女性からの告白は幾度となくあったが、29歳になるいままでも、自分から女性に「好き」という言葉を言ったことがない。

夕、タイミングがわからない…

大の男が緊張していた。

「暖まったら送っていくから、風呂でちゃんと温ったまれよ。

風邪引いてOLの仕事できなくなったら大変だからな」

マサルは、恭子の前にお湯を置き微笑んだ。

恭子はお湯の入ったマグカップを両手で包んだ。

「あ、あのさあ。あのさあ…」コタツに入りながらマサルが口ごもる。

「んん？なあに？」

恭子は返事をしながら、マサルが座っている後ろに詰まっていた原稿用紙の間に

雑誌が紛れているのに気が付いた。

マサルはまだ、「あのさあ…」と言いつけている。

いつたいつまで「あのさあ」を言い続けるのか、残念ながらその声は小さくなる一方だ。

恭子は、雑誌など買わないマサルにしては珍しいと思い、一瞬「エロ本？」と思ったが原稿用紙の間からそれを抜き取った。

マサルは雑誌に伸びた恭子の手を見て「あっ」と小さい声だけたてて、顔をコタツの上に伏せた。

恭子はその雑誌を手に取ってチラッとマサルを見た。
美和から貰った雑誌の表紙は坂井恭香。

「・・・」 恭子は顔を伏せているマサルに

「いつから…知ってたの？」

静かに問いかけてみたが、マサルは伏せたまま何も言わない。

少しの沈黙のあと、恭子がもう一度聞いた。

「…マサル？ねえ、いつから？」 まだ何も言わないマサルの肩

を揺ると、

「グーグーグー…グー」 と、取って付けたようなイビキをかく。

恭子はそんなマサルが可笑しくなつてクスクスと笑つた。

マサルは自分の肩に置かれた恭子の手を掴み、少し顔を上げて恭子の目を見て言った。

「今、俺の前にいるのは女優の坂井恭香じゃなくて、OLの坂井恭子だから…」

俺の好きなのは…坂井恭子だから。恭子が…好きだ」

赤い顔をしたマサルは、恭子の手を掴んだまま、またコタツに伏せた。

「うん…うん…」 恭子は笑顔で小さくうなずき、

初めて言われたマサルからの「好き」という言葉にうれしくて涙ぐんだ。

この日から恭子の携帯の中にあるメモリーは
「スガノ マサル」 「友達」 から
「スガノ マサル」 「大切な人」 に登録し直され、マサルは昇
格した。

(12) 弟・優治

マサルがコタツに向って原稿を書いていると携帯が鳴った。持っていたペンを口にくわえ、体を捻り万年寝床の上の携帯を取り、出た。

「もひもひ…」

「兄貴？今日家にいる？バイト？」 3才年下の弟・優治からだ。

「いや、今日はバイト休みだ」

「じゃ、夜行くから。晚ご飯買ってくけどなにがいい？」

マサルからの返ってくる答えはわかっているが、優治は一応聞いた。

「肉」

「…わかった」

兄貴、「肉」しか言わねーんだよなあ。いつつも…

7時過ぎに優治がアパートにやって来た。

「ほら、ステーキ弁当とビール。あと、適当に買ってきたから、ちやんと食べなよ？」

優治は兄・マサルを心配して定期的に食料を運んでいる。

「うっひょ〜肉！サンキュー」

喜ぶマサルを見ると優治は嬉しくなる。小さい時からいつもマサルの後を追いかけて

慕っている。優治にとってマサルは、いまでも大好きな兄だ。

二人はビールを開け、弁当を食べ始める。

「兄貴、最近どう？小説の方は」

「おう！ばつちり！」
なにがバツチリなのかわからないが、マサルはいつも自分の小説は
自画自賛だ。

「母さんが心配してるよ。兄貴、ちゃんと飯食ってんのかとか、
風邪引いてないかとかさあ。父さんも本当は心配してんだよ」
優治は自分のステーキ弁当の肉を二切れマサルの弁当に入れながら
言った。

「あつ、増えた、肉」

マサルは聞いているのかいないのか優治の話に返事をしない。

「あつ、貴子ちゃんが昨日うちに遊びに来たんだ」

「貴子が？」　マサルは二本目のビールを開けた。

「うん、たまに来てるだろ？貴子ちゃん、ここに」

「ああ……」

「で、兄貴の様子を母さんたちに報告してたよ。元気に痩せ細って
いってて

もつすぐ、栄養失調で病院に運ばれて家に帰って来るから心配要
らないって……」

「……」

「そしたら母さんが余計心配しちゃって、僕に見て来いって。だか
ら今日来たんだよ」

「貴子め……」

貴子は親同士が決めたマサルより一つ下の婚約者だ。

親同士が友人で子供の頃から知っている。

マサルももつすぐ30歳になり、貴子は29歳になる。

お互いの両親は早く結婚してほしいが、マサルがマサルなだけに、ちゃんとした就職にもつかず売れない小説を書いていることで中々事が運ばない。

貴子は別段あせるわけでもなく、時折マサルのところに来て一人で近況報告をべらべら話して帰っていく。

そんな貴子だからか、親が決めた婚約者と言っても、マサルは楽しんでいられる。

弁当を食べ終えたマサルはビールのつまみにさきいかを食べ始めた。

「あーひさびさのさきいか…うまいなあ」

「ぶっつっ！」 優治が飲んでいたビールを吹き出した。

「あんだよ、汚ねーなあ」

「だって、兄貴…いっつも食いもんで感動すんだもん」 優治がまた笑い出した。

「食いもんはどんなものでも、ありがたく感謝と感動を込めていただく！それが大切だ。」

優治は苦労をしらなすぎる！

マサルは兄らしく言ったが

「兄貴の苦労は自分で作ってるだけじゃねーかよ。小説書くんなら家に帰ってきても

いいじゃん？そしたら母さんの手料理だって…」

マサルは優治の口を手で押さえた。

「それ以上言うな…おかーちゃんの手料理を思い出しちゃうじゃないかあぁ」

マサルはふざけるように言ったが、すぐ後に

「家には帰んねーよ。おやじと顔合わせて飯なんか食いたくないからな」

そう言ったマサルの顔は笑ってはいない。

「わかってるよ…。でも、僕は兄貴と一緒に仕事がしたい。

兄貴が父さんの仕事を継いで、僕は兄貴の片腕になって働きたい
ってずっと思ってる。

小さい頃からずっとそう思ってる」

優治が溜息まじりにマサルを見る。

「家はおまえが継げ。俺には無理だ。そんな甲斐性はない！！」

それに俺は小説を書いていた」

マサルは真直ぐ前を見てそう言った。

マサルと父・優三は気が合わない。

というより、優三はマサルが売れない小説を書いているのが気に食
わない。

マサルは自分が小さい頃から、父親の会社の跡継ぎにされ結婚相手
を決められ、

なんでも勝手に決めてしまう父・優三を嫌っていた。

ずっと反発していたが大学を出たと同時に家も出て、好きな小説を
書き続けている。

生活はきついが優三と一緒にいるよりは、貧乏でも今の生活のほう
が数万倍幸せを
感じている。

ただ、母親には申し訳なく思っていた。心配をかけ、近くに住みな
がらも中々顔を
見せられない。

「春に父さんが還暦祝いのパーティーやるんだけど、兄貴、出るだろ
？」

優治がさきいかを裂きながら聞いた。

「ああ？還暦パーティー？なんで俺が出るんだよ。欠席！」
マサルは怪訝な顔をした。

「それくらい出るよ。母さんがまた泣くからさあ。あつ、スーツあるだろ？」

マサルは春に優治からイタリアブランドの高級なスーツを買っていた。

「…ない！スーツなんてないから出れない！から、出ない！」

そう言い、マサルはビールをグビグビと飲んだ。

「今年の春に渡したやつ。あれでもいいし、家に戻れば何着も置いてあるでしょ？」

「…スーツは質屋だ！」

「ええー！あれ、すごく高かったんだぜ！兄貴に似合うと思ってイタリア行った時、

母さんと見立てたのに、なんだよ質屋ってー」

優治はガツクリとコタツの上に頭を乗せた。

「はははっ、すまん！高い割にはあんまり金になんなかったぞ、質屋のおやじ、

足元見やがったか！！くそ！！」

「そういう問題じゃなくて…しょうがねーなあ、まあ」

優治はガツクリ気分だが、そんな兄をいつも許してしまっ。

「あつ、そつだ！忘れてた」

優治がゴソゴソと鞆から何かを探し、コタツの上にのせた。

「・・・」 マサルは何も言わずそれを見た。

マサル名義の貯金通帳。

前回、優治が来たときに「おやじに返しておいてくれ」とマサルが渡したものだ。

大学の頃から毎月かかさず、同年代のサラリーマンの月給の倍以上の額が

振り込まれている。

マサルは学費は出してもらっていたが、通帳に振り込まれるお金には手をつけていない。

ただ一度だけ、道端で怪我をしていた野良猫を見つけ動物病院に連れて行き、

治療費がなく、止むなく8500円を下ろしたが、バイト代が入るとすぐに返した。

通帳は相当な額が手付かずのまま入っている。

マサルは何度か優治を介して実家にこの通帳を返しているが、必ずまた優治が持つて

きてしまう。

「母さんもさあ、兄貴がこれ持っているだけで少しは安心するんだから、使わなくても

ここに置いておいてよ」

優治は何度この言葉を兄・マサルに言っているだろうか。

10時が回り、優治は「正月くらいは家に帰って来いよ」と言い残し、

マサルのアパートを後にした。

実家とアパートを何度も行き来している通帳は、コタツの上にのせられたままで。

「はぁぁ……」

マサルの溜息は大きかった。

(13) 粉雪

クリスマス・イヴ。

夜の空には、手が届きそうなくらいの低い雲が空に広がっている。

恭子は7時に仕事を終えたが、その後、いつもお世話になっている業界の人たちとのクリスマスパーティーに参加した。

マサルは深夜1時までバイト。

そのあと友人宅の風呂を借り、自分のアパートに向い歩いていた。

日付はもう、イブからクリスマスに変わっている。

マサル御用達のエロ本立ち読み専門のコンビニを通り過ぎると

「マサル！」　コンビニから突然恭子が出てきた。

「なにやってんだよ、こんな時間に！あぶねーだろ?!」

恭子は12時前に自宅マンションに着き、マサルの帰宅時間に合わせ駅近くのコンビニで

マサルを待ち伏せしていた。

「迎えに来たのに…」　恭子は怒った顔をした。

「寒いし、あぶねーし…家で待つてればいいだろう?」

心配して言っているマサルの気持ちはわかってはいるが、恭子は脹れた。

「じゃあ先に帰ってまってるからいい!」　と、とつと足早に歩きだした。

マサルは呆れながらも恭子のうしろ姿を追いかけて手を掴み、

「送っていきますよ。お嬢さーん」　と、おどけて言ってみたが、

恭子の頬つぺたは脹らんだままだ。

マサルは苦笑いをしつつ、

「恭子の頬袋何入ってんの？ひまわりの種？クリスマスケーキ？

すんげーデカイ頬袋！ほらほらクリスマスなんだから、拗ねない拗ねない」

マサルは恭子の頬つぺたを両手で包んでつぶし笑った。

マサルを見上げている恭子の鼻の頭に冷たいものが落ちた。

「あれ？」　　恭子はマサルの手で潰された顔のまま空を見上げた。

マサルもつられて上を見ると、雪が二人の顔にあたり始めた。

「うわあ、粉雪！」

小さな結晶は地面に落ちることなく10分にも満たない時間、宙に舞うだけだったが

「プレゼント交換無し」と決めていた二人には空からの素敵なクリスマスプレゼントだ。

少しの間、二人は向かいあつたまま空を見上げていた。

「ほら、私がマサルのこと迎えに来たから一緒に見れたんだからね、雪！」

今度は恭子がマサルの頬つぺたを摘んだ。

「っ痛えなあ…、迎えに来てくれてありがとう！」

ニツつと笑ったマサルに、恭子はニツと笑い返した。

「冷えるから帰ろうか」

まだ少しだけ舞う粉雪の中、二人はアパートへ向った。

(14) 優と貴子

年始年末、恭子の仕事は休みで実家の田舎に帰って行った。

正月二日目、マサルは半年振りの実家にいた。

アパートから実家までは車で30分もかからない。しかしマサルにとっては遠い家だ。

この日、貴子と貴子の両親も新年のあいさつに菅野家を訪れていた。

マサルは帰ってきてから一言も父親と口を聞いていない。

食事の席でマサルの父・優三が言った。

「来年春に予定している私の還暦祝いのパーティだが、その席でマサルと貴子ちゃんの

婚約発表も一緒にやったらどうだろうかねえ」

マサルと貴子は「えっ！」と言う顔になったが、両親たちはほとんどん話を進めていっている。

いつものことなのだが、マサルはなにも言わず話も聞かず。

暇を持て余し、お飾りの伊勢海老の頭を皿にのせ、箸で黒豆を掴み伊勢海老の

触角に挿している。

「器用だよねえ、マサルって。なんで小説は売れないんだろうかねえ

…」

呆れた笑いを投げかける貴子だが、マサルの小説は読んだことがない。

「おまえはいつも一言多いんだよっ！」

マサルはそう言うと貴子の皿に伊勢海老の頭をおいた。

マサルと貴子が小競り合いをしていると貴子の母が

「あらあら、もう夫婦喧嘩かしら？」 と品の良い笑いでうれしそうに言った。

愛想笑いも起きないマサルはただただ時間の過ぎるのを待った。

ここで席を立つと母が悲しむのがわかっていているからだ。

貴子たち家族が帰ったあと、優三が跡継ぎの話を持ち出したが、マサルは端から

聞く耳は持たず、正月そうそう喧嘩をしたくないと思い、母親が作ってくれた煮物を

持ってそそくさとアパートにもどった。

マサルと貴子が初めて会ったのは、まだ物心もつかない頃。

父親同士が友人で若い頃から仲がよく、その流れでお互いの家の行き来も多く、

小さい時から遊んでいた。

小学三年生の頃。

「おまえたちは婚約したんだぞー！」 マサルの父・優三が嬉しそうに言った。

その時は、マサルと貴子はなんのことやらわからず、そのまま思春

期を迎える。

中学高校と私立の共学と一緒に通った。父親たちが勝手に引いたレールだ。

ただ、本人たちはお互いに男女の意識は持ち合わせていなく、色恋じみたこともなく、自由にすごしている。

それは何年たつてもこれから先も変わらない。二人の間にあるのは友情だけだ。

男と女の友情。成り立たないといわれる友情は、成り立っている。

(15) マサル実家に帰る

今日も居眠りをしつつマサルはコタツの中で原稿用紙に向っていた。

携帯が鳴り、画面を見ると「家」と表示されている。

出ると父・優三の声が聞こえた。

「もしもし、優か？父さんだ」

マサルは話すことなどないと思い、切ろうとしたが

「おい、切るな！母さんが入院した」 優三が言う。

「…はあ？そんな古臭い手口で俺を引き戻そうとしてんのか？」

マサルは父を小バカにした。

「冗談で母さんを入院させたりしない。昨日、病院に運ばれた。

今は優治が付き添っている」

いつものように低い声だが、どことなく覇気のない優三の声だ。

マサルは、まさか…と疑いながら父の話をきいた。

母・由紀が昨日突然倒れ、病院に担ぎ込まれた。

意識はあり、命に別状はないが一週間ほどの検査入院をすることになった。

由紀は「優に心配を掛けたくないから言わないでくれ」

と、優三と優治に頼んでいたが、優三は「家族なのだから」とマサルに電話をした。

マサルは急いで病院に向った。

病室に入ると優治が、眠っている母の傍に座っている。

「兄貴……」

「おう、母さん、どうなんだ？」

マサルは心配そうな顔で母の顔を覗き、優治に聞いた。

「大丈夫だよ。大したことないって。もしかして父さんから連絡行つたの？」

「ああ。大したことなくても俺に教えないわけにはいかないって……」

「そうかあ……」 優治は少し嬉しそうにマサルを見た。

「優治、おまえ明日も仕事だろ？母さんは俺が見るから帰っていいぞ？」

マサルに言われ、優治は素直に従った。

優治が帰ったあと、マサルは恭子にメールを入れ、母親が入院したから当分アパートに帰れないことを知らせた。

マサルは母・由紀が入院している間、ずっと付き添い、多くの見舞い客の相手をし、忙しく日々を送った。

マサルは、時折アパートに戻ったりしていたが、恭子は映画の撮影に入っていたため二人が会える時間はなかった。

一週間後、由紀は退院し、マサルは少しの間、母を見ながら実家で小説を書くことにした。

「優が傍にいてくれる」と、由紀のうれしそうな顔を見、優三は影ながら喜んでいた。

その日、マサルと由紀が二人で昼食をとっている時、由紀が言った。

「優？貴子ちゃんと結婚なんてする気ないんでしょう？」

母の言葉に驚いたマサルは苦笑いになる。

「ちゃんとお見通しよ、お母さんは！」　　由紀は微笑む。

「ん？」

「お母さんは、優には好きなように生きてもらいたい。ずっとそう思っているの。」

もちろん、心配なんだけど…ちゃんとご飯食べているのかとか病気に気がないかとか

ものすごく心配なんだけど、優が自分で選んだ道を歩いて行ってもらいたい。

あんな頑固おやじの言うことなんて聞かなくてもいいわよ、ふふふ

由紀はやさしくマサルを見た。

「ありがとう、母さん…」　　マサルは鼻先で笑った。

「でも、まあ売れない小説家のところに来てくれるお嫁さんなんて…いないわよねえ

眠くなっちゃうよな小説書いてんですもの…」

鯖の味噌煮を食べながら由紀はボソボソと言った。

母もまた息子の小説を読もうと思いついているが、眠気を催すため未だ一冊も読破していない。

マサルはこの悲しい事実を知らない…

なんだよ…なんかみんなして売れない小説家とか言ってるし…俺のこと。

(16) 恭子、恋に破れる

マサルが母親の看病のため実家に戻ってから、恭子と会える時間はなくなっている。

ただ、お互い忙しくても朝と晩には必ずメールをしていた。

この日、業界の人間がよく利用しているクラブ「W」に、恭子は仲の良いテレビ局の

ディレクター、スタイリストの人たち十数人と飲みに来ていた。

VIPルームに入り小一時間ほど経ったころ、ドアのノックと共に数人の女性が入って来た。

「お久しぶりです」 彼女たちはディレクターと挨拶を交わした。

「おや、貴子さん、久しぶり。来てたのか」 ディレクターと貴子が話し始めた。

「さつき来たところなの。バーテンダーの山崎さんに、みなさんも来ていらつしゃると

聞いてご挨拶に来ました」
貴子は綺麗な微笑みを見せた。

恭子の隣に座っているスタイリストが恭子に耳打ちした。

「あの人、BBQテレビの会長のお孫さんで貴子さんって言うのよ。恭香ちゃん、

ネクスト・プロだったわよね？」

「え？そうよ」

恭子は何の疑問も持たず答え、スタイリストは話続けた。

「貴子さんとネクストの社長の長男って婚約してるはずよ？長男が

ネクストの

跡継ぎらしいし、結構いい男らしいんだよね〜」

恭子はネクスト・プロ所属だが、跡継ぎは次男の優治だとばかり思っていた。

ネクストのスタッフもそう思っている人は少なくない。常に事務所で仕切っているのは社長の次男坊の優治だ。

長男とは皆会った事もない。

恭子がディレクターに呼ばれ、貴子の近くに移動した。

「貴子さん、知ってると思うけどこちら女優の坂井恭香ちゃん」

恭子が紹介された。

「初めまして。坂井恭香です」

「初めまして。木田貴子です。いつもドラマ拝見させていただいております」

貴子は、品のある微笑みと共に丁寧に挨拶をした。

「・・・」 貴子が恭子の顔を少しの間、ジッと見た。

「な、なにか…?」

「あら?あなた、もしかして優の…!」

貴子の口から出た「マサル」という言葉に恭子はドキッとした。

「え?」

恭子は聞きなおした。

マサルのアパートに貴子が訪ねてきた時、恭子は貴子の顔も見ず部屋を出ている。

「あゝ、どこかで見たはずだわ。坂井恭香さんだったのね、ふふふ。あの時は

全然思い出せなかった。私のこと覚えてる？覚えてないかしら、あなた出て
行っちゃったから、急に。マサルのアパートで一度お会いしてる
んだけど…」

恭子の頭の中は少し乱れ、話が見えないでいると、

「そつだ、貴子さん婚約発表するらしいじゃないか。ネクストプロ
の菅野さんの

ご長男と…えーと、彼は優さんだったか？菅野優さん。恭香ちゃ
んはネクスト

だったよな？事務所！」

ディレクターの問いに「え、ええ」とだけ答えた。

恭子はドキドキと高鳴っていく鼓動の中、一生懸命頭の中を整理し
ようとした。

心臓の音は周りにも聞こえるのではないかと思うくらい大きくなっ
て自分の耳に
響いていた。

貴子は何か言いたげだったが、ディレクターから別の話を持ちかけ
られ、

恭子と話すきつかけを失くした。

その後、恭子は自分でもどんな顔をしているのかわからないまま、
次の日の仕事を

いい訳にし、みんなより先に「W」を後にした。

マンションに戻り、明かりもつけないままフローリングに座り込んだ。

「スガノマサル」

「かんの ゆう」

「菅野優」

「スガノ マサル……」

ネクストプロ社長は「菅野 優三ゆづせう」

「貴子」という名は、マサルに連れて行ってもらったレストランで聞いたことも思い出した。

貴子さんの婚約者は、ネクストプロ菅野社長の長男…優。

マサルのアパートで会った女性は貴子さんだったの？

「彼女じゃない」って…

「婚約者……」

恭子が頭の中で一つ一つ組み合わせていく。

自分の中で全てが組み合わさったとき、胸から起こるキュンとした感覚を覚え、

それは、体全部を通り指先にたどり着く。

恭子は自分の手をにぎりしめ、声を殺して泣いた。

翌日から恭子は立ち直れないまま仕事に出ている。

撮影ではNGを立て続けに出してしまい、いつもの坂井恭香と違う

雰囲気からスタッフから心配され、坪井も溜息をついた。

恭子は、仕事に集中できないで現場の共演者、スタッフに迷惑をかけている自分に腹立たしく情けなかった。

恭子からメールの返事が来なくなり、マサルが何度か恭子に電話をしているが、

コールはされても恭子は出ることはない。

一度アパートに戻った際、恭子のマンションを見にいくつもりでいた。

そんな時、マサルの家に貴子が来た。

貴子がクラブ「W」で恭子に会ったことを話、事情を説明した。

「たぶん、ものすごい勘違いしちゃってると思う、恭子さん。みんながいたから、

優と私の関係を話しできなかったんだけど…ちゃんと説明しておいたらよかった…」

貴子は申し訳なさそうに言ったが、マサルは「貴子は気にするな」といい、

その日の夜、マサルは恭子のマンションに足を向けた。

外から見た恭子の部屋の明かりはまだ点いていない。

マンションの石段に腰を下ろした。

30分ほどして坪井の運転する車がマンション前に止まり、恭子が車から降りてくると

マサルは立ち上がって恭子の前に来た。

恭子はマサルの顔を見ようとしない。

見てしまったら涙がこぼれる。

困惑する恭子とマサルの間に坪井が入って割った。

「な、なんですか?! 君は!! 困るんですね、ファンの方がここに」

喋っている坪井をマサルはすごい力で押しつけた。

坪井は2mほどすっ飛び、腰を抑えつつ立ち上がり、マサルにまた近づいた。

「な、ななななにするんだ、君! ぼ、ぼぼっすりよく…ふがふがあモゴモゴ!」

坪井の顔を片手で抑え、坪井を無視したままマサルが恭子に言った。

「恭子、俺の話、聞いてくれるかな…?」

恭子は俯いたまま

「何も話すことなんかありませんから…貴子さんと結婚して…ずっと…ずっと」

眠くなるような小説書いててください」

そう言い、マンションに入っていこうとした。

じたばたしている坪井の顔を抑えていたマサルは、坪井をまた2m程すっ飛ばし、

恭子の腕をつかんだ。

「恭子、話…」と、いいかけたマサルの腕を振り払い

「もう…話すことなんて、ない…」

恭子は弱弱しい涙声で言うとマンション扉の暗証番号を押した。

エントランスの扉が開き中へ入っていく恭子の背中に向って

「菅野、菅野優三の還暦パーティーには来いよな！」　マサルは大きな声で言った。

一瞬、恭子は立ち止まったが、振り返ることもなく、逃げるようにエレベーターホールに消えた。

マサルが溜息と共に振り返ると、

「うおっ！なんだよ、びつくりすんじゃねーかよ」

坪井がヨレヨレで真後ろに立っていた。

「き、君はなんだ！け、警察を呼ぶぞ！」

坪井は「ハアアアッ！」と言いファイティングポーズをした。

「・・・」　マサルは口角を上げて坪井を見て笑い

「いつも父と弟がお世話になっております」　と頭を直角に下げた。

「…へっ？」

坪井は胸の前で作っていた拳を下に下ろして落ちぶれたボクサーになった。

恭子は久しぶりに会ったマサルに動揺し、掴まれた腕の感触を忘れられず

また涙が溢れ出した。

早く忘れなきゃ…仕事…がんばらなきゃ…

そう思えば思うほど、あせる心は空回りしていく自分に自信が持てなくなっている。

(17) お互いの道

マサルは父・優三に電話を入れた。

「明日のパーティーは6時ごろに貴子と一緒に行くから。ちゃんと出席するから」

優三は、自分の還暦祝いの日、「次期社長の優」と「優の婚約発表」をゲストに紹介できることに大喜びだった。

「明日は俺の夢が叶う日だ！」と夕食の時にウキウキ気分で晩酌をしていた。

優三・還暦パーティーの当日。

そんなウキウキおやじがまだ眠りにについている早朝の成田空港に、マサルと貴子は立っていた。

貴子の荷物はスーツケースではなくボストンバック一つとPCだけだ。

貴子は前の晩「マサルのアパートに泊まる」と両親に嘘をいい、都内のホテルに一人泊まった。

マサルは優治から借りた車で、貴子をホテルまで迎えに行き、空港に見送りに来ていた。

「気をつけて行けよ」

マサルは出発ロビーで貴子に言った。

「うん、いろいろありがとう。マサルも恭香さん…じゃなくて、恭子さんを、

ちゃんと捕まえるんだよ！」

「おう！がんばります！おまえも出戻ってくんじゃねーぞ」

「いや〜ねえ。出戻るわけないじゃない」

マサルと貴子の顔はうれしそうに笑いあう。

「じゃあ」 貴子は手を出した。

「がんばれよ」 マサルと貴子は握手をし、貴子は出国審査口に入って行った。

一度振り向いた貴子は固い決意を感じる微笑を見せた。

貴子の姿が見えなくなるまでマサルは見送り、

「夕方まで一眠りするかなあ」

と、空港で一人伸びをし、そのまま自分のアパートに戻った。

一週間前、マサルと貴子は二人でレストランの個室で食事をした。

貴子は食前酒を一気に飲み干し、宣言をするかのようにマサルに言った。

「マサル、私決めました！！」

「何を？」 マサルはのん気に聞く。

「行く事に決めた。行く！」

「イク？」

「あのね、カタカナで言うの止めてくれる？漢字の「行く」なんだから！」

くだらない事を言いつつ、貴子は続けた。

「やっぱり、彼のところに行くわ。日本に未練も何もない。私には彼が必要だから！」

貴子の目は力強い。

「おお！やつと決めたか！」 マサルは貴子に拍手を送った。

「はい！貴子！彼の元へ飛び立ちます！！！」

「いよっ！貴子ちゃん、目が燃えてるぜ！！！」 マサルはまた拍手をした。

貴子には恋人がいる。

大学の卒業旅行の旅先で出会ったモロッコの人と恋に落ちた。

卒業旅行から帰って来て、まっさきに「好きな人ができた」とマサルに報告した。

それから7年の間、親に内緒で貴子は幾度も彼の元に通い、マサルも応援してきた。

今回、貴子がモロッコに移住することを彼に報告すると、彼はきちんと日本に来て

貴子の両親に挨拶をしてくれるが、マサルがすっかりと恭子をつかまえるまで

待ってもらうことにしていた。

そして貴子はマサルだけに見送られて日本を旅立って行った。

午後6時過ぎ、マサルは優治に買ってもらった新しいスーツに身を包み、

このスーツは質屋にいれたらいくらだろう。

などと考えながら、約束通り優三の還暦パーティーに現れた。

7時から始まるパーティーは、都内のホテルで行われ、ネクスト・プ
口の芸能人、

スタッフはもちろん、いろいろな業界から沢山の人が出席する。

すでに多くの人が集まってきている。

一個人の還暦祝いとしては盛大過ぎるが、優三の顔の広さがうかが
えた。

「貴子ちゃんはどうした？」 優三に聞かれたが

「ああ、ロビーで知り合いと会って、少しお茶をしてから来るって」
マサルは白々しく言った。

貴子の両親もすでに来ていたが、娘はマサルと一緒に来ていると思
い込んでいる。

マサルは優治を探し、耳打ちをした。

優治はうなずき、笑った。

(18) いただきます！

恭子は撮影が少し延びたため、パーティーの始まるギリギリに会場に着いた。

坪井と一緒に受付を済ませ、中に入ると沢山の人に来ていて、恭子は顔見知りの人たちに声を掛けたり掛けられたりして挨拶を交わした。

そんな中、マサルの姿を見つけた。父親の菅野優三と一緒に業界のお偉いさんたちと談話している。

いつもと違い、黒い細身のスーツに、今日はちゃんとネクタイもして髭も剃って髪型はオールバックにしていた。

(マサルさんって、カッコイイわよね！)

(ああ、一度でいいからデートしたい！)

普段のマサルを知らない人たちの会話だ。

(今日はマサルさんの婚約発表もあるのかな？) (貴子さん羨ましい〜)

(でも貴子さん、まだ見てないわよ) (控え室でお披露目準備してるんじゃない?)

近くにいた人たちの言葉は恭子の耳に有無を言わず入ってくる。

胸は縛られるほど苦しくて、マサルのことを離れたところから見ていただけしか出来ない

恭子は、鼻の奥がキュンとして涙がでそうだった。

泣くな！恭子！忘れるって決めたんだから！

全然忘れられずにいるが、鼻を少し吸って自分に言い聞かせた。

「恭ちゃん、パーティーが始まって自由になったら社長のところに挨拶に行くからね。」

その時、優さんにも挨拶しておこう。次期社長になる人だから「恭子は、坪井の言葉に「はい…」と小さく返事をするこじかできなかった。」

逃げ出したい…早く帰りたい…ここから、この場所から早く離れたい…

恭子は大きな扉の出入り口付近の壁に寄りかかっていた。

「なになに、恭香ちゃん…こんな壁の花になっちゃって!」

先輩女優の片岡寿美子が声を掛けてきた。

「片岡さん…」 恭子は弱弱しい微笑みを向けた。

「あなたは主役級の女優なんだから、こんな隅にいたらダメじゃない。」

もっとこう、ぶわ〜と、大川有美みたいな高ビーな女優になんないよ!

ふふふ。まあ、無理かな? 恭香ちゃんは、やさしい子だし、いい子だから」

恭子は、何気ない片岡の言葉になぜか涙が出てしまった。

「え! え! やだやだ! 私なんか変なこと言っちゃった? どうしよう、え〜ん、

ごめ〜ん」

片岡は自分の頬を両手で挟みあせり出した。

「違うの…違う…」

恭子は片岡の慌てぶりが可笑しくなって、涙をぬぐいながら

「違うから…片岡さんのせいじゃないから…ありがとう」

片岡に抱擁した。

「あつらあゝ、やだわ！女がこんなところで二人で抱き合っちゃって！」

派手なドレスを纏った女優・大川有美がやって来た。

「なによ、大川ちゃん。後輩をいじめに来たの？」 片岡が言うと

「やだわあ、片岡ったら！私、そんな意地悪な女優じゃなくてよん」
大川は片岡のお尻を叩いた。

「ちよつとおゝ大川！なにすんのよ！」 片岡が大川のお尻を叩き返す。

同年代の片岡と大川はいつもふざけあっているが、世間ではライバル同士と見られていて「ふざけてお尻の叩き合い」も週刊誌に載ると「本気で頬の殴り合い」に変化する。

それでも二人は仲が良く、恭子にもやさしく接してくれている。

恭子は知らないが、今日も片岡と大川が、恭子の様子がおかしいと話し、心配して声を

掛けてきた。

二人のやり取りを見ていて恭子の心は少し和らいだ。

「片岡にいじめられたからって泣かないの！私が後でしばいておくから、この女は！」

大川はそういうと自分のハンカチで恭子の涙をふいてあげた。

「…ちよつと！私がいじめたんじゃないわよ」

片岡と大川はまたふざけてじゃれ合う。その様子はカメラにしっかりと収められ、

後日、「片岡VS大川、後輩坂井恭香の前で大喧嘩！！恭香泣く！」と

スポーツ誌にデカデカと取り上げられた。

会場の照明が徐々に落とされ薄暗くなっていった。パーティーが始まる。

恭子は扉の近くで片岡と大川と一緒に立っている。

司会者が段取りよく進行させて、還暦を迎えた菅野優三が挨拶に立った。

優三は来客たちに礼を述べ、少しスピーチをしたあと、

「今日はこの席で紹介したい人物がいる」と言い、マサルの名が呼ばれた。

マサルは父・優三の横に立った。

「わたくしの長男で、このネクスト・プロダクション次期社長として継いで」

優三がマサルを紹介している話など恭子の耳には何一つ入ってこない。

壇上に立つマサルの姿を見るのも辛く、ずっと下を向いていた。

紹介されたマサルがマイクを握った。

「ただ今、父・菅野優三から紹介の言葉を頂戴いたしました長男の優でございます」

恭子は一瞬、マサルの声に顔を上げたが、すぐさままた下を向いた。

「本日は父・優三のために沢山の方々にお祝いしていただき家族共々感謝して

おります」

しっかりとマサルが来客に挨拶をし礼を言っているその姿に、優三は満足し、

よしよし、優も一人前になったなあ。私は嬉しいぞおお。などと、満面の笑みを浮かべ、少し涙ぐみ、うなずいてた。

満足げな父を余所目に、マサルは一呼吸置いた。

そして少し笑いながら、

「俺はネクスト・プロの後は継ぎませんで！」
片手を上げた。

「へっ？」

優三はマサルの顔を見たまま壇場で固まり、来客はざわめいた。

マサルは続けた。

「跡継ぎは俺の弟、次男の優治に任せます。それからネクスト・プロダクションの

みなさん、すみません！！女優の坂井恭香こと坂井恭子は、俺がいただきます！！」

マサルはそれだけ言うとマイクを投げ捨て、扉のすぐ横にいた恭子のところに

真直ぐに向って行った。

そして、そのまま恭子の手を掴み、会場を出て走り出し、赤い絨毯が敷き詰められている

ロビーを抜けてホテルを後にした。

マサルは、恭子が会場に入って来たら、恭子の居場所をチェックするように優治に頼んであった。

壇上に上がる際、「恭香さん、中央扉の右側」 弟・優治が軽く耳打ちをした。

マイクを握ったマサルは一瞬だけ扉の方を向いて恭子を確認した。

そして、マサルは恭子を連れ出し逃げた。

恭子はわけもわからずマサルの手を握ったまま一緒に走り続けた。走りながら時折、恭子の方を見るマサルの顔は、微笑んでいる。

恭子はヒールが高すぎて走りずらいが、マサルの手が離れないように一生懸命走った。

会場では来客たちが騒ぎ出し、あっけに取られていた坪井が我に戻り、

「お、追えー！」 とスタッフに言い、追いかけたが、時すでに遅し見失い、

片岡と大川はなんだか嬉しそうに酒を飲み交わし、父・優三はずっと固まったままだ。

「おい、父さん？あれ？！動かないよ。銅像になってどうすんだよ…

まだ銅像になるには早すぎるぜ、父さん…」

優治は今がチャンスと優三をバンバンと叩きながら言うつと、

母・由紀も笑いながら一緒になって夫・優三の頭を引っぱたいた。

ほほほ、あーッ、楽しいわあ。

夜の閑散とする休日の副都心。

マサルと恭子はホテルを飛び出し、もう息が続かない、というくらい一生懸命、走って、走って、高架橋のところまで来た。

息が上がって何も言えなかったが、お互い繋いでいる手は離れてはいなかった。

マサルは少しだけ息が落ち着いてから、恭子を抱きしめた。まだ大きい鼓動を押さえきれないマサルの胸の中に、恭子は顔をうずめた。

「ごめん、恭子の気持ちも聞いてないのにネクストプロから奪ってきちゃった」

「うん！」

「もう、恭子の好きな女優の仕事辞めなきゃならないかも」

「うん！」

「俺と一緒にになったらピンボーまっしぐらだと思っ」

「うん！」

「冬はコタツだけかもしれない」

「うん！」

「飲み水は水道水だ！」

「う、うん！」

「ペットは小蠅だ！」

「……」

それはイヤなので返事に困った。

「もう、不安にさせるようなことは二度としない」

「うん！」

「…俺がいる。恭子の傍にはずっと俺がいる」

「はい！」

抱きしめたままマサルが言い、

抱きしめられたまま恭子がつなずく。

まだ肌寒い春の夜、上弦だけが二人を見ていた。

(19) 五年後、最終話

五年後

恭子の部屋は、今日もオレンジのアロマオイルのいい香りがしている。

チャイムが鳴り、リビングにマネージャーの坪井が入って来た。

「恭ちゃん、ちゃんと台詞覚えた？ 今日からクランクインだからね、ビシツとね。」

なんつてったって、久しぶりの映画で主演だからね！ 頑張っている！

坪井が張り切った大きな声を出した。

「ふ、ふ、ふぎゃー……」

「まったく、坪井ちゃん！ デケー声だすなよ！」 マサルが坪井を睨んだ。

「あつ、すまんすまん、あつ、ごめんよ、おつよしよし」
坪井はマサルの背中におんぶされた赤ん坊をあやした。

「優由、ママちよつとお仕事行ってきますからねえ、」

パパの言うことちゃんと聞いて待っていてね」

恭子があやすと赤ん坊・優由が大人しくなった。

5年前、パーティー会場から逃げた二人は、副都心の高架橋の上でマサルのプロポーズをもってお互いの気持ちを確かめあったが、その後、二人とも、財布も何もかもホテルのクロークに預けてあることに気づき、パーティー終了後を見計らい、間抜けながらホテルに戻った。

父・優三は、マサルをあきらめ優治に後を継がせた。
ネクストが坂井恭香を手放すわけがなく、恭子はそのまま女優を続けている。

貴子はモロッコで二児の母親になり、親子四人、盆と正月に日本に戻ってきては山のような日本食のレトルトを買ってモロッコに帰っていく。

マサルと恭子は3年前に結婚をし、恭子は8ヶ月前に男の子を出産した。

子供の名は、優三の「優」と母・由紀の「由」を取り「優由^{まひよし}」とした。

優三はえらく感激し、孫にこれでもかといっくらいおもちゃを買い与えているがマサルにしてみれば優由の「優」の字は、自分の「優」の字であると考えている。

が、おもちゃはありがたくいただいている。

恭子は、2年間休業していた女優の仕事に、先月復帰宣言をした。

復帰第一弾の仕事は現代映画の主演だ。
結婚、妊娠、出産をしても彼女はファンの人たちから指示されている。

マサルは家事・育児と主夫をしながら、恭子曰く、「不眠症の方必読の純愛小説」を

書き続け、「坂井恭香のだんなさま」ということを売りに息子・優由のミルク代とおむつ代くらいは稼いでいる。

マサルは広いリビングの真ん中に小さいちゃぶ台を置き、そこで一生懸命小説を書いている。

冬になるとそのちゃぶ台はコタツになる。

コタツはアパートの時のものより、少し大きくなった。

恭子は、小説を楽しそうに書いているマサルの背中が大好きだ。あの頃と変わらない、いつもの背中。

ただ変わったことは、広く大きいマサルの背中が少し見えなくなっってしまった。

今はまだ小さな家族がマサルの背中を独占している。

少しの間だけ、優由に貸してあげるからね…

「じゃ、いつてきますー!」

「いつてらっしやい。今日も頑張れよ！」
恭子はマサルと優由の頬つぺたにキスをし、仕事場に向った。

洗濯機から洗濯終了のメロディーが鳴り、
「おっと！お洗濯終わりかー？」
マサルは、ちゃぶ台の前から立ち上がる。

今日もベランダでは、三人分の洗濯ものと共に、少しグレーになっ
た白いイルカの
ぬいぐるみが干され、気持ちよさそうに太陽を浴びている。

(19) 五年後(最終話)(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

拙い文章の上、ありきたりな流れの物語になってしまいました。日々精進いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2343h/>

オレンジと坂道

2010年10月9日10時28分発行